The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北宋太祖・太宗期の内外軍事情勢と軍事指揮官 : 都部署を中心に
Author(s)	伊藤, 一馬
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2019, 59, p. 1-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72096
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

北宋太祖・太宗期の内外軍事情勢と軍事指揮官
――都部署を中心に――

伊 藤　一 馬

はじめに

960 年に成立した北宋（960 ～ 1127 年）は，太平興国四年（979）五月の北漢併合により，唐末五代期における動乱・分裂状態を脱して「中国 China Proper」の再統一を達成した。そしてその後，北宋は「中国」再統一の達成と同時に，当時のユーラシア東方において形成されつつあった，前代とは大きく様相の異なる国際情勢への対応という，新たな課題に直面することとなったのである。

北宋の成立以来，北方の契丹（遼）が北宋にとって最大の脅威であり，北漢併合後には燕雲十六州をめぐる軍事衝突も本格化するが，真宗景徳元年（1004）に澶淵の盟が成立して両者の関係に長期的な安定をもたらすとともに，それを契機としてユーラシア東方における「多国並存」という状況が現出する[1)]。ただ，北宋にとって契丹は依然として脅威であり続けたし，また西北方に興起した西夏（タングート）や南方で「独立」を達成した北部ベトナムの大越（前黎朝・李朝）にも北宋は対処する必要が生じていた。これら三勢力と対峙する地域には大量の軍事力を駐屯させ，その維持費も含む軍事費が財政支出の八割を常時占めるなど，以後，北宋の滅亡に至るまで，これら三勢力への軍事的・外交的対応は北宋の諸政策を規定する，重要な課題であったのである[2)]。

ところで，北宋は成立当初から，唐末五代の藩鎮跋扈・武人政治の弊害に鑑み，種々の中央集権政策を実施し，文治主義を推進したとされる。これは軍事政策の面においても例外ではなく，例えば節度使の権限削奪や藩鎮の解体，軍事力の禁軍（皇帝直属軍）への一元化と中央（＝開封）への集中，更戍法に基づく周期的な部隊の地方派遣・交替，枢密院と三衙（殿前司・侍衛親軍馬軍司・侍衛親軍歩軍司）による兵権の分掌，文臣である枢密使や三司使による三衙の司令官（＝管軍）への掣肘などが挙げられる[3)]。こうした施策は，防衛体制の強化や軍備の充実を意図していたわけではなく，中央・地方を問わず皇帝を脅かしうる軍事

力・軍事指導者の出現やその遠心化を防止し，皇帝を頂点とする軍事力の中央集権化や文臣による軍事力の統制を目的としていたと理解されよう。

従来の北宋軍事史研究は，禁軍への注目や中央集権的側面の強調という傾向を有していたように思われるが[4]，果たして上述の目的を有したとされる中央集権や文治主義のもとで，北宋を取り巻く当時の対外的な軍事情勢に対応できたのであろうか。近年では，中国・台湾の研究者を中心に宋代軍事史研究の成果が蓄積され，その中には例えば，北宋太祖・太宗期に強い権力を有して高い地位にあった武人・武将，数世代に亘って武人・武将を輩出する家系――将門――への注目や，北宋期における軍事や“武”を再評価しようとする視点も認められる[5]。こうした宋代軍事史研究における成果は，中央集権や文治主義などを前提とする宋代史像に見直しを迫るものと言えよう。これらの研究では必ずしも同時代の国際情勢との関わりは意識されているわけではないが，宋代史研究においては周辺勢力との関係を念頭に置きつつ，ユーラシア東方という枠組みの中で宋朝を捉え直す視点も提起されている[6]。宋代史研究に今なお大きな影響力を有する唐宋変革論に対しても，「中国」の枠組みを越えてユーラシア東方規模での諸地域の交流といかに整合的に理解すべきかを考える必要性も指摘されている[7]。

また，周知の如く，五代中原王朝の内，後梁を除く後唐・後晋・後漢・後周は，その起源を唐末のテュルク（トルコ）系沙陀・李克用軍団（李晋藩鎮）に持つ「沙陀（系）王朝」であり，王朝の交替や皇帝の継襲は，実質的にその基盤であった軍団（＝沙陀軍団）内での指導者の交替であったと言える。沙陀軍団は李克用以来，拡大・再編を経ながらも後周まで至り，さらにそこから北宋の太祖・趙匡胤が登場する。すなわち，北宋の成立も李克用軍団から続く沙陀軍団内の政権交代の系譜に位置付けられるのである[8]。こうした連続性については，唐末五代期における非漢人・遊牧系の武人・軍事集団の存在や活動実態，さらには北宋成立後の非漢人・遊牧系の武人・軍事集団の存在や禁軍への編入を明らかにした，近年の沙陀・テュルク・ソグド研究などの成果によって裏付けられている[9]。

しかしながら，沙陀・テュルク・ソグド研究では，非漢人・遊牧系の武人・軍事集団が，北宋の軍事行動や軍事体制においてどのような役割を果たしていたのか，あるいはいかなる重要性を有していたのかなどの点については明らかにされていない。また，宋代軍事史研究においては，前代すなわち唐末五代期の歴史展開，ユーラシア東方や中央ユーラシアの情勢との関連はあまり意識されていない。

本稿では，北宋の太祖・太宗期における内外の軍事的課題への対応を，特に軍事行動・軍事体制を担う軍事指揮官に着目して検討する。

太祖・太宗期は「中国」の再統一が進められ，新たに契丹・大越・タングートとの軍事的・外交的緊張が生じるなど，北宋を取り巻く国際情勢の基本構図が形成された時期と言える。一

方で，太祖・太宗はそれぞれその即位当初には確固とした権力基盤や正統性を有しておらず，その確立・安定のために軍事力の掌握を図ったという。また，種々の中央集権・文治主義政策は太祖・太宗期に実施されたとされる。すなわち，太祖・太宗期の北宋は，内外に軍事的課題を抱えており，且つそれを両立する必要に迫られていたのである。しかしながら，上述の通り従来の研究では「内」向きの側面が注目されてきたことは否めない。太祖・太宗期の北宋が，政権基盤の確立・安定を図りつつ，同時に自らを取り巻く国際情勢へも対応するという内外双方の軍事的課題をどのように克服・両立しようとしていたのか，問い直す必要があろう。

以上を踏まえ，本稿では，まず太祖・太宗期の軍事情勢を概観した上で，どのように軍事行動が行われ，どのような軍事体制が構築されていたのかを確認する。次に軍事行動・軍事体制を担う軍事指揮官の出自や経歴，特に太祖・太宗との関係に着目し，どのような人物が軍事力を委ねられていたのかを考察する。以上を通じて北宋の太祖・太宗期における内外の軍事的課題への対応がいかにして克服・両立されていたのかを検討し，最後に唐末五代やユーラシア東方の歴史展開への位置付けを試みる。

1　太祖・太宗期の軍事情勢

北宋の太祖期（960～976年）は，自らの政権・権力基盤の安定を図りつつ，「中国」再統一への歩みを進めた時期と言える。

北宋が成立して間もなく，建隆元年（960）四月に潞州に拠る昭義節度使の李筠が，九月に揚州に拠る淮南節度使の李重進が，それぞれ「叛乱」を起こす。李筠・李重進ともに後周時代からの有力者であり，北宋政権あるいは趙匡胤にとっては「叛乱」であったが，実質的には沙陀軍団内における主導権争いと捉えられよう。

この二つの「叛乱」を鎮圧した後，乾徳元年（963）正月の荊南・楚の討伐を皮切りとして，北宋は「中国」再統一へと本格的に乗り出していく。荊南・楚を相次いで併合したことで，北宋は江南の南唐，四川の後蜀という二強国の間を分断することに成功する。その後，乾徳二年（964）二月に北漢へ攻め入り遼州を奪取し，救援に駆けつけた契丹軍も撃退して遼州を確保する。同年十二月には川陝・荊湖の二方面から後蜀へ進攻し，翌乾徳三年（965）正月に蜀主・孟昶の降伏により後蜀も併合する。これにより長江上・中流域を押さえると，北宋は矛先を北方へ転じて北漢の併合を目指し，開宝元年（968）八月に北漢討伐の軍を興す。翌開宝二年（969）二月には太祖自身が親征に乗り出し太原を包囲するものの，結局北漢を降すことはできず六月には撤退する。その後，再び南方に転じて開宝三年（970）九月に南漢へ征討軍を派遣し，開宝四年（971）二月に南漢を併合する。そして，開宝七年（974）九月に南唐を攻めると，呉越王・銭俶にも出兵を命じて二方面作戦を採り，開宝八年（975）

十一月に南唐の併合を達成するのである。

これらの軍事行動を経て，北宋による「中国」再統一へ向けた実質的な障害は，契丹の後ろ盾を持つ北漢のみとなっていた。開宝九年（976）八月，太祖は満を持して再度の北漢進攻を命じる。このときの北漢進攻は本隊に加えて別動隊が五方面から攻め入る大規模なものであったが，同年十月に太祖が突如崩御すると，跡を継いだ太宗趙匡義が撤退を命じたため，北漢の併合と「中国」再統一は太宗期に持ち越されることとなったのである。

続く太宗期（976 ～ 997 年）は，北宋が「中国」再統一を達成し，その後に契丹・大越・タングートとの軍事衝突が生じたことで，北宋を取り巻く情勢が大きく変化して軍事的・外交的緊張が高まり，それへの対応に迫られた時期と言える。

開宝九年十月，兄・太祖趙匡胤の跡を継いで即位した太宗趙匡義は，踰年を待たずして太平興国と改元するとともに，太祖の派遣した北漢討伐軍に撤退を命じる。その後，太平興国四年正月に北漢への親征を敢行，太原の包囲・攻城戦を経て，五月に遂に北漢を併合した。ここに，北宋による「中国」再統一が達成されたが，それは同時にそれまで北漢の背後に見え隠れしていた契丹との本格的な軍事衝突が不可避となったことを意味していた。

「中国」の再統一を果たした太宗は，その勢いを駆って契丹の幽州攻撃（＝北伐）を命じ，念願の燕雲十六州の奪回を図る。しかしながら，この第一次北伐は七月に高梁河で敗れて撤退を余儀なくされ，失敗に終わる。これ以降も太宗は燕雲十六州を奪回する機会を窺っており[10]，雍熙三年（986）三月に再度の北伐を敢行する。「雍熙用兵」とも称されるこの第二次北伐では，三路より契丹に進攻した北宋軍は順調に進軍していたものの，五月に岐溝関で大敗を喫し，またもや撤退に追い込まれたのである[11]。

この後，十二月に契丹の大軍が攻め寄せ北宋が甚大な被害を受けると，雍熙四年（987）四月に太宗は「禦戎策」を下問する［『長編』巻28, 雍熙四年四月己亥］。さらに端拱元年（988）十一月に再び契丹の侵攻を受けると［『長編』巻 29，端拱元年十一月］，その直後の端拱二年（989）正月に「備辺禦戎之策」を文武の群臣に再び下問する［『長編』巻 30，端拱二年正月癸巳］。この二度の「禦戎策」の下問や，雍熙用兵以降に契丹に対する軍事行動を北宋が興していないことに鑑みれば，北宋の対契丹政策は，契丹からの侵攻に備えて防衛体制を整えるという姿勢に転換したと言えよう。

このように，北漢の併合によって「中国」再統一を達成した北宋は，契丹への対応という新たな課題に直面していたが，これに加えて南方の大越や西北方のタングートとの間にも，それぞれ新たな軍事的緊張が生じていく。

太平興国五年（980）七月，北宋は南方の大越に対して遠征軍を派遣する。大越は唐滅亡後に「独立」を達成したものの，この時期には政治的混乱に陥っており，それに乗じて直接支配に組み込もうとしたのである。しかしながら，この遠征は黎桓（前黎朝・大行皇帝）に

よって撃退され，大きな被害とともに翌年三月に撤退する[12)]。その後，大越では黎桓死後の内乱など政治的混乱が続き，北宋との関係も不安定なままであった。

また，西北方においては，太平興国七年（982）に夏州に拠る定難軍節度使政権の内紛を契機として，領袖・李継遷が北宋に叛旗を翻す。以後，李継遷は北宋に対して叛服を繰り返し，時に契丹の後ろ盾も得ながら北宋と契丹との間を立ち回りつつ，夏州・霊州・銀州などオルドス地域一帯をめぐって北宋との攻防を繰り広げていく。この間，北宋は淳化五年（994）や至道二～三年（996～997）に大規模な征討行動を興すものの，李継遷を討つには至らず，夏州・霊州・銀州などを失陥し，各地で李継遷に備える必要が生じるのである[13)]。

以上のように，北宋の太宗期には「中国」再統一を達成する一方で，北宋を取り巻く軍事的・外交的緊張の高まりという情勢の変化と，それへの対応という新たな課題も生じていた。すなわち，北方の契丹，南方の大越，西北方のタングートとの間で軍事衝突が生じたのである。しかし，そのすべてにおいて失敗し，あるいは劣勢に立たされたことで，それまでの対外拡張路線は縮小・転換を余儀なくされたと言えよう。この後，契丹・大越・タングートとの軍事的・外交的緊張は真宗景徳年間（1004～1007年）にひとたび緩和されるものの[14)]，この三勢力への軍事的・外交的対応は，北宋一代を通じて重要な課題であり続ける。太宗期は，北宋を取り巻く対外情勢の基本構図が形成された時期でもあったのである。

2　太祖・太宗期の軍事行動・軍事体制と都部署

本章では，太祖・太宗期の軍事情勢において，どのように軍事行動が行われ，どのような軍事体制が構築されていたのか，特にその中核を担う軍事指揮官に主に着目して検討する。

まず，太祖・太宗期の軍事行動における陣容を整理した**表1**・**表2**を一見すれば，ほとんどの場合に指揮官として都部署が任命されていることが分かる[15)]。北宋の都部署は，軍事行動の指揮官として，あるいは地方軍事体制の統轄者として，北宋の軍事情勢の中で重要な役割を担っていたことが知られ，また，北宋前期においては枢密院・三衙と並び立つものとして位置付けられることもある[16)]。都部署については，地方統治体制や軍事体制を論じる際に言及されるほか，陳峰［2001; 2004］，張邦煒・杜桂英［2006］，趙冬梅［2004］諸氏の専論もあり，その基本的な性格や沿革，位置付けなどは明らかになっていると言える。しかしながら，個々の事例に照らせば，先行研究とは異なる見方が可能な点もあるように思われ，北宋前期都部署の性格や位置付けについては，なお検討の余地が残されている。そこで本章では，先行研究も踏まえつつ，太祖・太宗期の軍事行動・軍事体制における軍事指揮官の役割や位置付けを，都部署を中心に分析することとしたい。なお，以下では典拠の注記がない場合，**表1**・**表2**に拠っている。

表１　北宋太祖期の主な軍事行動と陣容

年月	内容	典拠
建隆1.4 （李筠）	侍衛親軍副都指揮使・帰德軍節度使 石守信，殿前副都点検・義成軍節度使 高懐德；殿前都点検・昭化軍（鎮寧軍）節度使 慕容延釗，彰德軍節度観察留後 王全斌，行営壕寨使：前德州刺史 曹翰／前耀州刺史 張暉；侍衛親軍都指揮使・天平軍節度使 韓令坤	兵7，長1
建隆1.9 （李重進）	揚州行営都部署兼知揚州行府事：石守信，副：殿前都指揮使・義成軍節度使 王審琦，都監：宣徽北院使 李処耘／客省使 潘美，排陣使：保信軍節度使 宋延渥	兵7，長1
建隆4 （乾德1).1 （荊南・楚）	湖南行営都部署：山南東道節度使兼侍中 慕容延釗，都監：宣徽南院使（枢密副使）李処耘，壕寨使：申州刺史 聶章，内酒坊副使 盧懐忠，氈毯使 張継勲，染院副使 康延沢，行営戦棹都監：判四方館事 武懐節，先鋒都監：郢州刺史 趙重進；行営馬軍都指揮使：淄州刺史 尹崇珂	兵7，長4
乾德2.1 （北漢）	昭義節度使 李継勲，兵馬鈐轄 康延沼，馬歩軍都軍頭 尹訓（勲）；彰德節度使 羅彦瓌，西山巡検使 郭進，内客省使 曹彬	兵7，長5
乾德2.11 （後蜀）	川陝方面（鳳州路） 西川行営前軍（鳳州路）兵馬都部署：忠武軍節度使 王全斌，副：武信軍節度使・侍衛歩軍都指揮使 崔彦進，都監：枢密副使 王仁贍，行営馬軍都指揮使：龍捷右廂都指揮使 史延德，歩軍都指揮使：虎捷右廂都指揮使 張万友，先鋒都指揮使：隴州防禦使 張凝，濠寨使：左神武大将軍 王継濤，馬軍都監：内染院使 康延沢，歩軍都監：翰林副使 張煦，壕寨都監：供奉官 田仁朗，随軍水陸転運使：給事中 沈義倫 荊湖方面（帰州路） 西川行営前軍（帰州路）兵馬副都部署：寧江軍節度使・侍衛馬軍都指揮使 劉光義（劉廷讓），都監：内客省使兼枢密承旨 曹彬，前軍戦棹部署：客省使 武懐節，行営馬軍都指揮使：龍捷左廂都指揮使 張廷翰，歩軍都指揮使：虎捷左廂都指揮使 李進卿，先鋒都指揮使：前階州刺史 高彦暉，壕寨使：右衛将軍 白廷誨，馬軍都監：御厩副使 米光緒，歩軍都監：儀鸞副使 折彦贇，先鋒都監：八作副使 王令厳，壕寨都監：供奉官 郝守濬，戦棹左右廂都指揮使：馬歩軍都軍頭 楊光美，西南面水陸諸州転運使：均州刺史 曹翰	兵7，長5
乾德6 （開宝1).8 ～開宝2.2 （北漢）	河東行営前軍都部署：昭義軍節度使（・同平章事）李継勲，副：侍衛歩軍都指揮使・彰信軍節度使 党進，都監：宣徽南院使・義成軍節度使 曹彬；先鋒部署：棣州防禦使 何継筠，都監：懐州防禦使 康延沼；汾州路部署：建雄軍節度使 趙賛，副：絳州防禦使 司超，都監：隰州刺史 李謙溥；北面都部署：彰德節度使 韓重贇，副：義武節度使 祁廷義（祁廷訓）；河東行営都壕寨使：潁州団練使 曹翰，副：八作使 王令厳	兵7，長9，長10
開宝3.10 （南漢）	賀州道行営兵馬都部署：潭州防禦使 潘美，副：武陵（朗州）団練使 尹崇珂，行営馬軍都監：道州刺史 王継勲→郴州刺史 朱憲	兵7，長11
開宝7.9 （南唐）	昇州東南行営招撫制置使：呉越国王 銭俶；昇州西南路行営馬歩軍戦櫂都部署：宣徽南院使・義成軍節度使 曹彬，都監：山南東道節度使 潘美，先鋒都指揮使：潁州団練使 曹翰；侍衛馬軍都虞候 李漢瓊，侍衛歩軍都虞候 劉遇，判四方館事 田欽祚，東上閤門使 梁迥	兵7，長15
開宝9.8 （北漢）	河東道行営馬歩軍都部署：侍衛馬軍都指揮使 党進，都監：宣徽北院使 潘美，行営馬歩軍都虞候：虎捷左右廂都指揮使 楊光美；先鋒都指揮使：龍捷第二軍都指揮使 牛思進，都監：西京作坊副使 米文義；壕寨使：八作使 李継昇，都監：供奉官 梁鋭；河東道忻代等州行営馬歩軍都監：鎮州西山巡検・洺州防禦使 郭進；西上閤門使 郝崇信，解州刺史 王政忠；内衣庫副使 閻彦進，沢州刺史 斉超；内衣庫副使 孫晏宣，濮州刺史 安守忠；引進副使 斉延琛，晋隰等州巡検・汝州刺史 穆彦璋；洛苑副使 侯美	兵7，長17

【凡例】兵＝『宋会要輯稿』兵，長＝『続資治通鑑長編』

表２　北宋太宗期の主な軍事行動と陣容

年月	内容	
太平興国4.1 （北漢）	北路都招討兼制置太原行府：宣徽南院使 潘美，太原城東面洞子頭車壕寨使：河陽節度使 崔彦進，都監：郢州防禦使 尹勲，寨主：馬軍副都頭 朱守節，随行濠寨：供奉官 史彦斌／殿直 段珣；南面洞子頭車壕寨使：相州（彰徳）節度使 李漢瓊，都監：冀州刺史 牛思進；西面洞子頭車壕寨使：桂州観察使 曹翰，都監：饒州防禦使 杜彦圭；北面洞子頭車壕寨使：曹州（彰信）節度使 劉遇，都監：光州刺史 史圭［珪？］；四（西）面壕寨都監：八作使 郝守濬，行営馬軍都指揮使：馬軍都虞候 米信，都監：西上閤門使 郭守文，行営歩軍都指揮使：歩軍都虞候 田重進，都監：判四方館 梁迥；太原石嶺関都部署：雲州観察使 郭進，太原城四面壕寨都監：西上閤門使 田仁朗／閤門祗候・供奉官 劉緒	兵7，長20
太平興国4.6 （契丹幽州）	定国軍節度 宋延渥（宋偓），尚食使 侯昭愿；河陽節度 崔彦進，内供奉官 江守鈞；彰信軍節度 劉遇，儀鸞副使 王賓；定武軍節度 孟元喆，閑厩副使 張守明；知幽州行府事：宣徽南院使 潘美；桂州観察使 曹翰，洮州観察使 米信	兵7，蕃1，長20
太平興国5.7 （大越）	邕州路兵馬都部署：蘭州団練使 孫全興，八作使 郝守濬，鞍轡庫使 陳欽祚，左監門衛将軍 崔亮；廉州路兵馬都部署：寧州刺史 劉澄，軍器庫副使 賈湜，供奉官・閤門祗候 王僎；交州路水陸計度転運使：知邕州・太常博士 侯仁宝	兵8，蕃4，長21
雍熙3.1 （契丹幽州）	幽州道行営前軍馬歩軍水陸都部署：天平軍節度使 曹彬，副：河陽節度使 崔彦進，都監：内客省使 郭守文；都指揮使：日騎天武四廂都指揮使 傅潜，馬軍都指揮使：龍衛右廂都指揮使 李延斌，歩軍都指揮使：神衛左廂都指揮使 馬正；左廂排陣使：濱州刺史 盧漢贇，右廂排陣使：萊州刺史 楊重進；先鋒都指揮使：馬歩軍都軍頭 范廷召，都軍頭 田紹斌，都監：文思使 薛継昭，宮苑使 李継隆；監押部署：光州刺史 陳廷山／隰州刺史 史珪，都監：左神武軍将軍 劉知信／六宅使 符昭寿，三壕寨：崇儀使 賀令図／八作使 郝守濬 幽州西北道行営馬歩軍都部署：侍衛親軍馬軍都指揮使・彰化軍節度使 米信，副：汾州観察使 杜彦圭，都監：蔚州観察使 趙延溥／内衣庫使 張紹勍／引進副使 董愿，排陣使：亳州刺史 蔡玉，先鋒都指揮使：馬歩軍副都軍頭 韓彦卿／竇暉，曹美 定州路行営馬歩軍都部署：侍衛親軍歩軍都指揮使・静難軍節度使 田重進，都監：右衛大将軍 呉元輔／西上閤門使 袁継忠 雲應朔等州行営馬歩軍都部署：忠武軍節度使 潘美，副：雲州観察使 楊業，都監：西上閤門使 王侁／順州団練使 劉文裕，押陣都監：磁州団練使 郭超楼櫓戦棹都指揮使：馬歩軍都軍頭 高瓊，左右廂都監：崇儀副使 張承儼／安得祚；并州駐泊都監：西上閤門使 王侁／右監門衛将軍 侯莫／陳利用	兵8，太35
淳化5.1 （李継遷）	河西行営馬歩軍都部署：侍衛馬軍都指揮使・邠州節度使 李継隆，行営兵馬鈐轄（都監）：長州団練使・尚食使 尹継倫	兵8，長35
至道2.4～9 （李継遷）	環慶霊州清遠軍兵馬都部署：侍衛馬軍都指揮使・静難軍節度使 李継隆，副：殿前都虞候・涼州観察使 范廷召；霊州兵馬都部署・内外都巡検使：会州観察使・知霊州 田紹斌；霊慶兵馬副部署：深州防禦使 尹継倫；夏綏麟府州兵馬都部署：殿前都指揮使 王超	兵8
至道3.1 （李継遷）	延州路兵馬都部署：侍衛親軍馬歩軍都虞候 傅潜，霊州路兵馬都部署：殿前都虞候 王昭遠，関右河西巡検：西京作坊使 石普	兵8

【凡例】兵＝『宋会要輯稿』兵，蕃＝『宋会要輯稿』蕃夷，長＝『続資治通鑑長編』，太＝『宋太宗実録』

（1）太祖期の軍事情勢と都部署

太祖期の都部署については，まず李筠の乱の鎮圧に当たった慕容延釗が行営都部署であったことが確認できるほか［『宋史』巻251，慕容延釗伝］，石守信が前軍都部署，高懐徳が副都部署に任じられている［『長編』巻1，建隆元年五月丁卯］。また，李重進の乱に際しては，石守信が揚州行営都部署兼知揚州行府事となり，王審琦がその副であった。

その後の「中国」再統一に向けた軍事行動では，南方の十国諸国に対しては，湖南行営都部署の慕容延釗（荊南・楚討伐），西川行営前軍兵馬都部署の王全斌（後蜀討伐・川陝方面）と西川行営前軍兵馬副都部署の劉光義（劉廷讓）（後蜀討伐・荊湖方面），賀州道行営都部署の潘美（南漢討伐），昇州西南路行営馬歩軍戦櫂都部署の曹彬（南唐討伐）が，それぞれ確認できる。また，北漢進攻においては，乾徳二年では昭義節度使の李継勲が指揮官となっており都部署の任命は見られないが，開宝元年（＝乾徳六年）には李継勲が河東行営前軍都部署に，開宝九年には党進が河東道行営馬歩軍都部署に，それぞれ任じられている。

これらの事例に拠れば，太祖期の主だった軍事行動において，その指揮官として都部署が任じられていたことは明らかであろう。

北宋前期の都部署は，行営都部署と駐泊都部署とに大別して理解されている[17)]。行営都部署は，臨時的・一時的に編制される征討軍・遠征軍――行営――の指揮官であり，軍事行動の終息による行営の解体と同時に，行営都部署も任を解かれるのが通例であった。一方の駐泊都部署は，前線に常駐して恒常的に管轄地域の防衛を担い地方軍事体制を統轄していた。これらは史料中では「行営」「駐泊」のいずれも冠せずに「都部署」とのみ現れることのほうが多く，截然と区別することは難しいが，太祖期の都部署はもっぱら行営都部署であったとされる。

実際に，すでに挙げた太祖期の軍事行動においては，都部署が任じられていた場合はそのすべてで行営が編制されていたことが確認でき，行営の軍事力を都部署が率いていたことが分かる。ここでの行営は，特定の対象・標的を設定され，臨時的・一時的に組織される征討軍・遠征軍と理解できるので，都部署もまた臨時的・一時的に任命される軍事指揮官であったと言える。ただ，李筠討伐の際に慕容延釗が知潞州行府事［『宋史』巻251，慕容延釗伝］を，李重進討伐の際に石守信が知揚州行府事をそれぞれ兼ねていたことや，南漢制圧後に潘美・尹崇珂が同知広州［『長編』巻12，開宝四年四月壬申；五月丁酉］，次いで市舶司使［『長編』巻12，開宝四年六月壬申］を兼ねていたことなどから，彼らは戦後処理や統治体制の再編なども期待されていたことが窺える。また，南漢併合後に嶺南の獠の反乱を賀州道行営（もしくは南面行営）から軍勢を派遣して平定したり［『長編』巻13，開宝五年八月己亥］，後蜀併合後に西川行営が四川の地に留まり残党の鎮圧などに当たっていたように[18)]，行営自体も軍事行動の終息後に即座に解体されていたわけではなく，駐留軍としての役割を果たすこともあったようである[19)]。

また，建隆元年の李筠討伐に際して楊承信が任じられた沢州西面都部署［『宋史』巻252，楊承信伝］，建隆二年（961）に韓令坤が任じられた北面縁辺兵馬都部署［『宋史』巻251，韓令坤伝］や王景が任じられた西面沿辺（縁辺）都部署［『長編』巻2，建隆二年三月辛亥；『宋史』巻252，王景伝］は征討軍・遠征軍を率いるのではなく，駐屯して各方面に備える役割

を負っていたようである。あるいは，開宝二年の北漢攻めに際して韓重贇が任じられた北面都部署が契丹に備えていたように［『長編』巻10，開宝二年二月丁卯；『宋史』巻250，韓重贇伝］，防衛を主たる目的とする都部署も存在していた。ただ，これらの駐屯して防衛を目的とする都部署も，軍事情勢の変動によって任じられていることから，基本的には一時的な任用であったと考えられよう。

なお，太祖期に軍事力を委ねられていたのは都部署と行営のみではなかった。太祖は後周世宗（柴栄）の「中国」統一路線（＝「先南後北」）を継承し，まずは南方の十国諸国を標的とし，国力を蓄えてから北漢やその背後にいる契丹に対して軍事行動を行うという意図を持っており，北方に対しては防衛体制の維持に努めていたとされる。太祖期には，契丹・北漢・「西戎」（＝タングート）への備えとして14名の武将が河北・河東・陝西の前線地域に配置されていた[20)]。これらの武将については陳峰・趙冬梅・山根直生氏らが分析を加えており，彼らは節度使や防禦使，兵馬都監や巡検などに任じられ，自由裁量権である「便宜行事」を認められて北辺防衛に当たっており，基本的に前線の任地に駐屯していた［趙冬梅2004; 陳峰2004; 山根2014］。そして，契丹や北漢からの侵攻があれば随時に対処し，ときには進攻することもあったようである。乾徳二年にこのうちの一人である昭義節度使の李継勲らが北漢の遼州を攻めたのは，こうした動きとして理解できよう。

次に，このような軍事行動や防衛体制を担う軍事力がどのように供給されていたのかを考えてみたい。例えば，李重進討伐の際には慕容延釗らが「侍衛諸軍」を率いていた［『宋会要輯稿』兵7，討叛，李重進］。また，後蜀討伐では王全斌が「禁軍歩騎二万，諸道州兵一万」，劉光義（劉廷讓）が「禁兵歩騎一万，諸道州兵一万」をそれぞれ率いていた［『宋会要輯稿』兵7，討叛，平蜀］。荊南・楚の討伐では「歩騎数千」および「安・復・鄂・陳・澶・孟・宋・亳・潁・光等州の兵」が動員され［『宋会要輯稿』兵7，討叛，周保権；『長編』巻4，乾徳元年正月戊午；正月庚申］，南唐討伐では曹彬・潘美らが「兵を領い」て前線に赴いて準備を整えており［『長編』巻15，開宝七年九月癸亥；九月甲戌］，開宝元年の北漢討伐でも盧懐忠らが「禁軍を率いて潞州に赴」き準備を整えていた［『宋会要輯稿』兵7，討叛，平太原］。

これらの事例からは，太祖期の軍事行動を担う行営の軍事力には，中央から派遣される禁軍と前線の駐屯軍が含まれ，時に両者は混在していたことが窺える。従来の理解では，北宋成立後に禁軍は開封に集められ，更戍法に基づいて地方へ派遣されると，知州系統の管轄下に入る屯駐禁軍と，都部署系統の管轄下に入る駐泊禁軍とに別れるとされてきた［堀1953; 羅球慶1957; 王曽瑜1983; 張徳宗1983］。しかしながら，太祖期について見れば，そもそも都部署は常置されていたのではなく，行営の編制に伴う臨時的・一時的な任用であった。また，中央からの禁軍派遣も行営の編制に伴う臨時的なものであり，定制化されていたわけでない

ので，更戍法とは切り離して捉えるべきであろう。これに対して，後蜀討伐に動員された「諸道州兵」や南漢討伐に集められた「安・復・郢・陳・澶・孟・宋・亳・潁・光等州の兵」などは，更戍法に基づき地方へ派遣されていたのであろう。さらに，上述の北辺防衛を担っていた武将たちは，自らの麾下の集団を擁していたことが指摘されている［趙冬梅 2004］。彼らが前線に常駐していたことに鑑みれば，その麾下の集団もともに常駐していたと考えられよう。彼らは，李継勲や郭進のように行営に加わって軍事行動に従事することや，自らも都部署に任じられることもあったが[21]，その際にはもともと擁していた集団もともに参加したのであろう。

このように，太祖期の軍事行動を担った行営を構成する軍事力は，中央から都部署とともに派遣される禁軍，各地に派遣されていた兵力，前線の武将の麾下の集団との混成であったと言える。そして，これらの軍事力を率いるのが，行営の指揮官たる都部署であった。

以上をまとめれば太祖期の軍事情勢は次のように捉えられる。すなわち，北方の北漢やその背後にいる契丹に対しては，節度使などの前線に常駐する指揮官が担う防衛体制を敷きつつ，叛乱の鎮圧や十国諸国の併合・制圧などのような北宋側からの軍事行動については，一時的に組織される行営とその指揮官たる都部署が主に担っていた。そして，行営の組織に際しては中央から派遣される都部署や禁軍のみならず，必要に応じて地方派遣・常駐の武将や兵力も行営に加わっていたのである。

（2）太宗期の軍事情勢と都部署

次に，太宗期の軍事行動における陣容・指揮官について確認する［**表 2**］。太平興国四年の北漢攻めとその後の契丹への進攻（北伐）については，北面行営が編制されたが太宗の親征であったため総指揮官は太宗自身であり，北路都招討制置使兼太原行府事や知幽州行府事に任じられていた潘美が実質的な指揮官であったと言える。また，太原の包囲・攻城戦では崔彦進・李漢瓊・曹翰・劉遇が東西南北の城門への攻撃を指揮していたほか[22]，郭進が石嶺関都部署として契丹からの援軍に備えていた。続く北伐の幽州攻城戦では，崔彦進・劉遇・孟玄喆・宋偓（宋延渥）が東西南北からの部隊をそれぞれ指揮していた。

この後，燕雲十六州の奪還を図って再度行われた北伐（雍熙用兵）においては，幽州道行営前軍馬歩軍水陸都部署の曹彬とその副の崔彦進，幽州西北道行営馬歩軍都部署の米信とその副の杜彦圭，定州路行営馬歩軍都部署の田重進，雲応朔等州行営馬歩軍都部署の潘美とその副の楊業がそれぞれ見えており，彼らが各方面から進攻する部隊を率いていた[23]。

このように，太宗期の対北漢・対契丹の軍事行動も，行営と都部署が担っていたことが分かる。さらに，「中国」再統一を達成した後に生じた南方の大越，西北方のタングートとの軍事衝突においても，やはり行営と都部署の存在を確認できる。

太平興国五年の大越遠征では，邕州方面と廉州方面の二方面から進軍するという作戦が採られ，それぞれ邕州路兵馬都部署・廉州路兵馬都部署が任じられ[24]，この大越遠征を担っていた軍事力は「交州行営」と称されていた［『長編』巻21，太平興国五年十二月辛卯；巻22，太平興国六年三月己未など］。また，オルドス地域を拠点として北宋に叛旗を翻した李継遷に対しては，例えば淳化五年には李継隆が河西行営馬歩軍都部署に，至道二年には再度李継隆が環・慶・霊州・清遠軍兵馬都部署，田紹斌が霊州兵馬都部署，王超が夏・綏・麟・府州兵馬都部署に，至道三年には傅潜が延州路兵馬都部署，王昭遠が霊州路兵馬副部署にそれぞれ任じられ，淳化五年の「河西行営」，至道二年の「夏州・延州行営」［『長編』巻40，至道二年九月己卯］や「夏・延・綏行営」［『宋会要輯稿』兵8，討叛，夏州］，至道三年の「霊州行営」［『宋太宗実録』巻80，至道三年二月庚子］や「環慶路行営」［『宋太宗実録』巻80，至道三年三月癸酉］などが見えるのである。

このほか，太平興国三年（978）の梅山洞蛮の乱に際して翟守素が都部署として鎮圧に当たったり［『小畜集』巻29，故商州団練使翟公墓誌銘］，淳化四年に生じた李順・王小波の乱の鎮圧のために川峡五十二州招安行営が編制されて趙昌言がその馬歩軍都部署に任じられるなど［『宋史』巻267，趙昌言伝］[25]，征討軍としての行営やその指揮官たる都部署も依然として存在していた。

このように，太宗期の軍事行動においても，臨時的・一時的に征討軍や遠征軍としての行営が組織されており，その指揮官として都部署が任用されている。これらは太祖期の行営と都部署の性格を引き継いだものとして理解できるだろう。

先行研究では，都部署は太宗期とりわけ太平興国四年・雍熙三年の二度に亘る北伐失敗を契機として，それまでの行営都部署から契丹に対する防衛を目的とする駐泊都部署へと移行するとされる。また，趙冬梅氏は北宋前期の地方軍事体制の形成と変遷を論じる中で，北宋前期の地方軍事体制を唐末五代期の藩鎮・節度使体制と北宋中期以降の経略安撫使体制との間に位置付け，都部署を頂点に戴く地方軍事体制――都部署体制――と捉える。氏に拠れば，都部署体制の萌芽は太祖期にすでに見えており，太宗雍熙・端拱年間（984～989年）に完成するといい，この背景としてやはり二度の北伐失敗が想定されている。そして，都部署の性格が変化し，それまで臨時的・一時的に任用されていた都部署が常置されるようになり，都部署を長官とする都部署司の設置によって都部署体制の形成へと至るというのである。このような理解は主に対契丹前線の事例や対契丹関係の推移に基づいているが[26]，すでに確認したように，対契丹前線以外の都部署や行営にも目を向ければ，雍熙年間以降も依然として行営と都部署が軍事行動を担っている点にも注意が必要であろう。

ただ一方で，先行研究が指摘する通り，対契丹戦線において北宋が守勢へと転換していく中で，防衛を目的とする都部署が設置されて増加していくことも，また事実である。

太平興国四年の北伐が失敗に終わった後，北宋は契丹の反攻への備えとして河北の定州に孟玄喆，鎮州に李漢瓊，関南（高陽関）に崔彦進を置き［『長編』巻20，太平興国四年七月庚寅；『宋会要輯稿』蕃夷1，契丹上，太平興国四年七月十三日］，河東の三交口に潘美を三交口都部署に任じて置いている［『長編』巻20，太平興国四年八月癸亥］。この時点では潘美のみ都部署であったが，太平興国五年末から六年にかけて関南の崔彦進，滄州の李漢瓊，定州の米信，鎮州の趙延溥がそれぞれ都部署に任じられている［『長編』巻21，太平興国五年十一月癸丑；巻22，太平興国六年八月乙丑；十月甲申；『宋史』巻254，趙延溥伝］。また，雍熙用兵の失敗の後，曹彬・崔彦進・米信らはその責を問われて開封に召還されるが［『長編』巻27，雍熙三年五月丙子；六月丙辰］，その後の十二月の契丹軍の侵攻に対しては，瀛州都部署の劉廷讓や滄州都部署の李継隆が迎撃したことが見える［『長編』巻27，雍熙三年十二月壬寅］。以後，雄州・邢州・貝州・冀州・天雄軍などにも都部署が配置され［**表4**］，契丹と対峙する北辺地域に配置された都部署が連携して契丹に備えるという防衛体制が形成されていくのである。

ただ，ここで注意を要するのは，こうした防衛体制においても依然として行営の軍事力が頻見する点である。例えば，対契丹前線に展開した軍事力は「河北縁辺行営」［『長編』巻21，太平興国五年十月甲午］や「北面行営」［『宋太宗実録』巻41，雍熙四年六月壬子］などと称されている。また，契丹の侵攻に対しては雍熙四年の「滄州行営」［『宋太宗実録』巻41，雍熙四年七月乙丑］，端拱二年の「鎮州行営」［『小畜集』巻28，宣徽南院使鎮州都部署郭公墓誌銘］や「定州行営」［『宋史』巻275，孔守正伝］なども見られる。すなわち，太宗期においても行営の軍事力は依然として軍事行動・軍事体制を担いつつも，常駐して防衛するという役割に重点が移り，都部署と同様にその性格を変化させていたことが窺えるのである。

この要因としては，「中国」再統一の達成により契丹との直接対峙が不可避となり，それまでと比べて戦線が拡大・膠着したことで，前線に配置される軍事力がほぼ常駐して攻守双方の状況に対応する必要が生じていたことが考えられる。このような背景があって，様々な規模の行営の軍事力が対契丹前線の各地に配置され，その行営の軍事力を指揮・統轄する役割を都部署が担っていたのである[27)]。すなわち，「中国」統一以前は叛乱の討伐や十国への遠征という軍事行動を主に担っていた臨時編制の行営が，太宗期の対外情勢の変遷とそれにともなう北宋の対外姿勢の転換によって恒常的な防衛体制をも担うようになった。そして，このような行営の性格の変化，役割の拡大を受けて，その指揮官たる都部署の性格や役割も変化・拡大したと捉えるべきであろう。

このように考えれば，太宗期の都部署も一貫して「行営を率いる都部署」であったと言える。そして，その行営は状況に応じて攻守の役割や臨時性・恒常性を帯びていたのである。都部署も，行営都部署か駐泊都部署かに截然と区別されるのではなく，行営を率いる都部署

表３　北宋太祖期の軍事指揮官

人名	出身地	父祖	自身	騎射	旧／側	都部署任用事例	列伝
石守信	開封浚儀		○		旧	建隆1：前軍都部署（長1）；揚州行営都部署（長1；兵7）	宋250
王審琦	祖は遼西		○	○	旧	建隆1：御営前洞屋都部署；揚州行営副都部署（長1；兵7）	宋250
高懐徳	真定常山	○	○	○	旧・婚	建隆1：関南副都部署；行営前軍副都部署（長1）	宋250
慕容延釗	太原	○	○		旧	建隆1：行営都部署兼知潞州行府事，建隆2：西南面兵馬都部署，乾徳1：湖南道行営前軍都部署（長4；兵7）	宋251
楊承信		○			旧	建隆1：沢州西面都部署	宋252
崔彦進	大名		○	○	側	建隆1：先鋒部署，乾徳2：西川行営前軍兵馬（鳳州路）副都部署（長5；兵7）	宋259
韓令坤	磁州武安	○	○		旧	建隆2：北面縁辺兵馬都部署	宋251
王景	莱州掖		○	○	旧	建隆2：西面縁辺（沿辺）都部署（長2）	宋252
王全斌	并州太原	○	○		旧	乾徳2：西川行営前軍兵馬（鳳州路）都部署（長5；兵7；兵14）	宋255
劉廷讓（光義）	涿州范陽	○	○	○	側	乾徳2：西川行営前軍兵馬（帰州路）副都部署（長5；兵7）	宋259
張仁謙	燕					乾徳2：関南兵馬部署（長5）	無し
李継勲	大名元城		○		側	開宝1-2：河東行営前軍都部署（長9；兵7）	宋254
党進	朔州馬邑		○	○	側	開宝1-2：河東行営前軍副都部署（長9；兵7），開宝9：河東道行営馬歩軍都部署（長17；兵7）	宋260
何継筠	河南	○	○			開宝1：河東行営先鋒部署（長9；兵7），開宝2：石嶺関部署（長10）	宋273
趙賛	幽州薊	○	○		旧	開宝1：邠州路行営部署（長9；兵7）	宋254
司超	大名元城		○			開宝1：邠州路行営副部署（長9，兵7）	宋272
韓重贇	磁州武安		○		側	開宝2：北面都部署（長10；兵7）	宋250
祁廷義（廷訓）	河南洛陽	○	○	○	旧	開宝2：北面副都部署（長10；兵7）	宋261
聶章						開宝2：沁州兵馬部署（宋274；長10）	無し
周広	応州					開宝2：攻城楼櫓戦棹都部署（長10）	宋271
田欽祚	潁州汝陰	○	○			開宝3：定州路兵馬都部署	宋274
潘美	大名	○	○		側	開宝3：賀州道行営兵馬都部署（長11；兵7），開宝4：南面行営都部署（長12）	宋258
尹崇珂	秦州天水→大名	○	○		側	開宝3：賀州道行営兵馬副都部署（長11；兵7），開宝4：南面行営副部署（長12）	宋259
曹彬	真定霊寿	○	○		側	開宝7：昇州西南行営馬歩軍戦櫂都部署（長15；兵7）	宋258

表４　北宋太宗期の軍事指揮官

人名	出身地	父祖	自身	騎射	旧／側	都部署任用事例	列伝
翟守素	済州任城	○	○			太平興国3（2？）：梅山洞蛮の乱で都部署（『小畜集』29）	宋274
潘美	大名	○	○		旧	太平興国4：三交口都部署（長20），太平興国7：并州都部署（長23），雍熙3：雲應朔等州行営都部署（兵8）；代州都部署（長27），雍熙4：并州都部署（長28）	宋258
崔彦進	大名		○	○	旧	太平興国4：攻城都部署？，太平興国5-6：関南兵馬都部署（長21；22），雍熙3：幽州道行営馬歩軍水陸副都部署	宋259
曹翰	大名		○			太平興国4：攻城南面都部署，太平興国5：幽州東路行営壕寨兵馬都部署（長21；蕃1）	宋260
李漢瓊	河南洛陽		○	○	旧	太平興国4：攻城都部署，太平興国6：滄州都部署（長22）	宋260

人名	出身地	父祖	自身	騎射	旧／側	都部署任用事例	列伝
劉遇	滄州清池		○	○	旧	太平興国4：攻城都部署？，太平興国5：幽州西路行営壕寨兵馬都部署（長21；蕃1）	宋260
楊業	并州太原	○	○	○	側	太平興国4：知代州兼三交駐泊兵馬都部署（長20），雍熙3：雲応路行営副都部署（兵8）	宋272
郭進	深州博野		○	○	旧	太平興国4：石嶺関都部署（長20；兵7；蕃1）	宋273
牛思進	祁州無極			○		太平興国4：石嶺関部署（長20）	宋273
符昭愿	陳州宛丘	○				太平興国4：知并門兼副部署	宋251
孫全興						太平興国5：邕州路兵馬都部署（長21；兵8；蕃4）	無し
劉澄						太平興国5：廉州路兵馬都部署（長21；兵8；蕃4）	無し
米信			○	○	旧	太平興国6：定州都部署（長22），太平興国8：定州兵馬部署（長24；太26），雍熙3：幽州西北道行営馬歩軍都部署（兵8），端拱1：邢州兵馬都部署	宋260
趙延溥	真定	○			側	太平興国6：鎮州兵馬都部署，雍熙3：滑州部署	宋254
曹彬	真定霊寿	○	○		旧	雍熙3：幽州行営前軍馬歩軍水陸都部署（兵8）	宋258
李継隆	潞州上党	○		○	側	雍熙3：滄州都部署（長27），端拱1：定州都部署（長29；太45），淳化1：定州都部署（蕃1），淳化5：河西行営都部署（宋5），至道2：霊・環十州都部署（太77）	宋257
劉廷讓（光義）	涿州范陽	○	○	○	旧	雍熙3：瀛州兵馬都部署（長27，蕃1），雍熙4：知雄州兼兵馬都部署（太41）	宋259
田重進	幽州		○	○	旧	雍熙3：定州路行営馬歩軍都部署（長28；兵8；兵14；蕃1）；定州駐泊兵馬都部署	宋260
楊重進	太原		○	○	旧	雍熙3：高陽関部署（長27）	宋463
崔翰	京兆万年		○		旧	雍熙3：威虜軍行営兵馬都部署，雍熙4：高陽関兵馬都部署（太41）	宋260
劉文裕	保州保塞	○			側	雍熙3：鎮州兵馬部署，雍熙4：鎮州兵馬都部署（太41）	宋463
戴興	開封雍丘			○	側	雍熙3：天雄軍副都部署，端拱1：澶州天雄軍都部署；鎮定都部署，淳化5：夏州路行営都部署	宋279
盧漢贇						雍熙3：代州副都部署（長27；宋5；兵14；蕃1）	無し
杜彦圭	定州安喜	○				雍熙3：幽州西北道行営副都部署	宋463
王承衍	祖は遼西	○		○	婚	雍熙4：知天雄軍府兼都部署；貝冀都部署（太41），端拱初：知天雄軍兼都部署	宋250
石保吉	開封浚儀	○		○	婚	雍熙4：知大名府兼兵馬都部署	宋250
趙鎔	滄州楽陵				側	雍熙4：知滄州兼兵馬部署（太42）	宋268
石曦	并州太原	○	○			雍熙4：知霸州兼兵馬部署（太41）	宋271
柴禹錫	大名				側	雍熙中：澶・鎮二州駐泊部署，端拱2：澶州兵馬部署（宋5）	宋268
劉知信	邢州	○				雍熙4：并州路副都部署（太41）	宋463
王杲	京兆			○	側	雍熙4：滄州行営副部署（太41）	無し
王昭遠	冀州阜城			○	側	？：洺州都部署，端拱2：并代副都部署，淳化3：并代兵馬都部署（宋5），至道3：霊州路都部署（長41；太80；兵8）	宋276
郭守文	并州太原	○	○		旧	端拱1：鎮州（鎮定）路兵馬都部署（長29；太45；兵8）；北面行営都部署	宋259
劉福	徐州下邳		○	○		端拱1：高陽関兵馬都部署（太44），端拱2：雄州防禦使兼本州兵馬部署，淳化2：雄州都部署（蕃1）	宋275
傅潜	冀州衡水				側	端拱1：高陽関都部署，至道3：延州路都部署（長41；太80；兵8）；鎮州都部署	宋279
王漢忠	徐州彭城			○	側	端拱1：冀貝二州部署；天雄軍部署，端拱2：高陽関副都部署	宋279
王栄	定州	○		○	側	端拱1：定州行営都部署	宋280

人名	出身地	父祖	自身	騎射	旧／側	都部署任用事例	列伝
高瓊	燕				側	端拱1：貝州部署，端拱2：并州馬歩軍都部署，淳化5：鎮州都部署（宋5），	宋289
葛霸	真定			○	側	端拱1：潞・代二州部署，淳化1：高陽関副都部署；高陽関都部署，	宋289
康保裔	河南洛陽	○	○	○		端拱1：定州・天雄軍駐泊部署；高陽関副都部署	宋446
楊賛						端拱1：貝州兵馬都部署（宋：5，太：44）	無し
皇甫継明	冀州蓨		○	○	旧	端拱2：并代副部署，淳化2：平虜橋砦兵馬副都部署；高陽関部署，至道1：環慶路馬歩軍都部署（太77），至道2：霊州部署（太77）	宋259
劉廷翰	開封浚儀	○	○	○	旧	端拱2：鎮州都部署（長30）	宋260
孔守正	開封浚儀		○		旧	端拱2：定州行営副都部署（長30），淳化1：高陽関副都部署，淳化2：代州部署；代・夏二州部署	宋275
范廷召	冀州棗強		○	○		端拱2：鎮州副都部署（長30），淳化2：平虜橋砦都部署；并代・環慶両路副部署，至道2：環慶霊副都部署（太77）；延州馬歩軍都部署（兵14）；并代両路都部署，至道3：定州行営都部署	宋289
安守忠	并州晋陽	○	○		旧	端拱中：高陽関駐泊部署	宋275
元達	洺州雞沢			○	側	端拱中：北面行営都部署	宋275
石保興	開封浚儀	○				至道2：延州路副都部署	宋250
慕容徳豊	太原	○				淳化3：知霊州兼部署	宋251
呼延賛	并州太原	○	○		旧	淳化3：冀州兵馬副都部署（長33）	宋279
折御卿	府州	○				淳化5：麟府兵馬都部署（兵14）	宋253
張永徳	并州陽曲	○		○	旧	淳化4：判并州兼并代都部署（長34）	宋255
銭守俊	濮州雷沢		○	○	旧	淳化4：河西？副都部署	宋280
趙昌言	汾州孝義				側	淳化5：川峡五十二州招安行営馬歩軍都部署	宋267
尹継倫	開封浚儀				旧	淳化5：深州駐泊兵馬部署，至道2：霊慶路兵馬都部署（太78）	宋275
丁罕	潁州					淳化5：霊環路行営都部署	宋275
郭密	貝州経城			○	側	淳化～至道2：貝州駐泊兵馬部署；高陽関兵馬都部署；霊州兵馬都部署（太77）	宋275
傅思讓	冀州信都			○	側	？：知冀州兼兵馬都部署（太78）	宋275
劉用	相州	○		○	側	至道1：高陽関副都部署	宋279
田紹斌	汾州		○		旧	至道1：霊州兵馬都部署（宋5），至道2：霊州兵馬都部署（太77；兵8）	宋280
楊瓊	汾州西河				側	至道2：霊慶路兵馬副部署（太79）	宋280
李重貴	孟州河陽			○	側	至道2：麟府路濁輪寨都部署；代并副都部署（長40）	宋279
王超	趙州				側	至道2：夏綏麟府州兵馬都部署（太78；兵8；兵14）	宋278
曹思進	中山					至道中：定州兵馬副部署（太77）	無し
曹璨	真定霊寿	○		○		至道中：鄜延路副都部署；麟府濁輪副部署	宋258
趙滔（瑫）	貝州清河				側	至道中？：鎮州兵馬副部署（太77）	宋275

※【表3，表4凡例】
父祖：都部署就任者の父祖が五代期から沙陀軍団に属している。
自身：都部署就任者本人が五代期から沙陀軍団に属している。
騎射：「騎射を善くす」「膂力有り」などと称されている。
旧／側：前代の旧臣か側近・親信であるか。「旧」が前代の旧臣，「側」が側近・親信，「婚」は婚姻関係があることを示している。
長＝『続資治通鑑長編』，宋＝『宋史』，兵＝『宋会要輯稿』兵，蕃＝『宋会要輯稿』蕃夷，太＝『宋太宗実録』
典拠を特に記していないものは『宋史』の各列伝に依拠し，適宜他史料により補足している。
楊賛・王杲は列伝のある人物とは別人。

が常駐（＝駐泊）するのか，一時的なもので任を解かれるのか，状況に応じて異なっていたと理解するべきであろう。

なお，太祖期に見られた節度使・防禦使や兵馬都監・巡検が前線に駐屯し，麾下の兵力を擁して防衛を担う体制は，行営および都部署の性格の変化とともに見られなくなっていく。太祖期の北辺防衛を担っていた14名の武将は，その多くが太祖期の後半から太宗期の前半にかけて死亡したり老齢になっていて離任している［山根2014］。太祖期に見られた節度使などと都部署との共存・役割分担という形から，太宗期には軍事力の担い手は都部署に一元化されていったと言えよう。

北宋の太祖・太宗期は北宋政権の安定，「中国」の再統一，契丹・大越・タングートへの対応という軍事情勢の変遷を経ながら，ユーラシア東方における北宋を取り巻く構図が形成されていく時期であったが，この時期の軍事行動・軍事体制は，行営の軍事力とその指揮官たる都部署に支えられていた。換言すれば，行営と都部署が北宋政権の安定，「中国」再統一の達成，新たな国際情勢への対処を担っており，延いては北宋一代の軍事・外交情勢の形成に大きく寄与したのである。

３　太祖・太宗と軍事指揮官の個人的紐帯

太祖・太宗期の北宋を取り巻く軍事情勢への対応，すなわち北宋の抱える「外」向きの軍事的課題への対応の中核を担っていたのは都部署であったと言える。それでは，太祖・太宗それぞれの権力基盤の確立・安定のための軍事力掌握や軍事力の遠心化防止など，北宋の抱えていたもうひとつの軍事的課題，すなわち「内」向きの問題に対して，都部署をはじめとする軍事指揮官はどのように関わり，どのように位置付けられるのであろうか。

都部署の位置付けについては，太祖期にはもっぱら武将が任じられ，地位・権力ともに極めて高かったものの，太宗期には武将の地位が低下するとともに文臣も任じられるようになり，「以文制武」すなわち文治主義に基づく武将抑制政策により，都部署の重要性も低下するとされる。また，都部署は北宋軍事制度において枢密院・三衙と並び立つものとして位置付けられることもある一方で，文臣である枢密使や三司使の掣肘を受け，やはり「以文制武」の原則のもとにあったと解されている。

これに対し，太宗期における文臣の都部署任用は成功せず，武将の地位の低下は真宗期以降であるという指摘［陳峰2001］や，文臣の都部署任用はそもそも「以文制武」に基づくものではないという指摘［張邦煒・杜桂英2006］もある。また，太祖・太宗期の枢密使や三司の長貳には武臣が多く任じられており[28)]，そもそも文臣による掣肘とは言えず，太祖・太宗期において武臣・文臣の区別を論じることはさほど重要ではないようにも思われる。太

祖・太宗期の都部署の位置付けについては，検討の余地が残されていると言えよう。

そこで注目したいのは，太祖・太宗期に軍事力を委ねられ，軍事行動・軍事体制の中核を担っていた，都部署をはじめとする軍事指揮官と太祖・太宗それぞれとの関係である。太祖・太宗期の北宋が抱えていた，権力基盤の確立・安定のための軍事力掌握や軍事力の遠心化防止という内向きの軍事的課題について，従来は中央集権・文治主義の推進という側面から解消が図られたと論じられてきた。しかしながら，このような見方は近年では見直しを迫られており，中央集権・文治主義を前提としない分析が必要となろう。軍事力掌握を希求した太祖・太宗が，どのような人物に軍事力を委ねるかという点に留意しており，都部署をはじめとする軍事指揮官の人選・任用が，内向きの軍事的課題にとって重要であったことは想像に難くない。以下では，太祖・太宗期の軍事行動・軍事体制を担っていた軍事指揮官が，太祖・太宗とどのような関係を有していたのかを検討する。

（1）前代の旧臣と側近・親信

北宋の武人・武将の出自や経歴などを網羅的に分析した何冠環氏［2003］や陳峰氏［2004］の成果に拠れば，太祖・太宗期の軍事指揮官は，前代の旧臣と側近・親信に大きく分けることができる。太祖期の前代の旧臣とは，北宋成立以前すなわち五代期より禁軍司令官や節度使などに就き軍事力を擁していた，太祖趙匡胤とも同輩に当たるような人物である。一方の側近・親信とは，後周時代より太祖の直接の麾下であったり，北宋成立後に太祖の抜擢・重用を受けた人物であるとみなせる。太宗期の前代の旧臣とは，太祖股肱の人物たちであり，側近・親信とは，即位前から太宗に仕えていた「藩邸集団」や太宗即位後に抜擢・重用を受けた人物であると言える。

こうした理解に基づき，太祖・太宗期の都部署就任者をはじめとする軍事指揮官の経歴を見れば，ある傾向を見出すことができる。すなわち，太祖期・太宗期ともに，軍事行動・軍事体制の中核を担う人物は，前代の旧臣から側近・親信へと移行していく，というものである［**表3**; **表4**[29]］。

例えば，太祖期の軍事指揮官のうち，石守信・高懐徳・韓令坤・慕容延釗・王景・楊承信・趙賛・王全斌などは，後周時代に節度使や禁軍司令官に就いており，前代の旧臣とみなすことができよう。一方で，韓重贇・劉廷讓・潘美・尹崇珂・崔彦進・党進は太祖の麾下に従っていた側近であり[30]，曹彬も太祖の側近・親信とみなすことができよう［柳立言 1992］。彼らの軍事指揮官としての活動時期を見れば，前者は建隆年間とりわけ李筠・李重進討伐，後者は乾徳年間以降の統一戦争という大まかな傾向を見出すことができる。

太宗期では，曹彬・潘美・劉廷讓・崔彦進らは太祖期から指揮官として任用されており，前代の旧臣と言える。また，劉遇・李漢瓊・米信・田重進・安守忠・孔守正・尹継倫・呼延

賛・皇甫継明・郭守文・劉廷翰・崔翰・郭進・田紹斌・楊重進・銭守俊らは，太祖の側近・股肱と目され［cf. 温水 1972; 陳峰 2004］，やはり前代の旧臣と言えよう。これに対して，柴禹錫・趙鎔・元達・郭密・王昭遠・傅潜・戴興・王漢忠・李重貴・劉用・王栄・楊瓊・高瓊・葛霸・劉文裕・王杲・趙滔・王超・傅思譲らは太宗の即位以前から仕えていた「藩邸集団」で，太宗の側近・親信である[31)]。彼らの軍事指揮官としての活動時期を見れば，太平興国四年の北漢親征や二度の北伐の中心が潘美・崔彦進・劉遇・曹翰・李漢瓊・曹彬・米信らであり，その後に太宗の藩邸集団からの任用も多く見られるようになることから［**表 4**］，太宗期の軍事指揮官についても前代の旧臣から側近・親信へ移行するという傾向は当てはまると考えてよいだろう。

それでは，このような傾向にはどのような意味があるのだろうか。ここで想起されるのは，太祖・太宗それぞれが三衙の管軍の任用を通じて，軍事力の掌握や権力基盤の確立を企図したとする，温水三男・見城光威両氏の指摘である。

温水氏は太祖期の管軍について，「前朝（＝後周）の軍帥」から太祖の親信の起用へと移行するようになり，建隆二年のいわゆる「杯酒釈兵権」によってそれが完遂されるという［温水 1972］。また見城氏は太宗期の管軍について，太祖股肱の武将から太宗の「藩邸集団」を任用するようになると指摘する［見城 2005; 2006］。両氏の指摘に拠れば，太祖・太宗ともに即位当初には軍事力を擁する前代の旧臣たちからの反発が強く，自らの権力基盤の確立や軍事力の掌握のために，彼らを警戒し，また排除する必要があったという。太祖・太宗が自らの側近・親信を管軍に任用することを通じて軍事力の掌握を図ったという点は首肯されよう。ただ，三衙の管軍については早くから虚銜（欠員）化や名誉職化していたことも指摘され，実際の軍事行動には従事しない場合も多い。太祖・太宗による軍事力の掌握という内向きの軍事的課題については，三衙の管軍のみならず，都部署をはじめとする，実際に軍事力を委ねられた軍事指揮官についても検討を進める必要があろう。

また，太祖・太宗が軍事力掌握のために障害となる前代の旧臣を警戒・排除したという点についても，再検討の余地があると思われる。なぜなら，太祖・太宗期における統一戦争や三方における軍事的緊張の高まりという状況下において，豊富な戦歴・経験を有する前代の旧臣たちを排除するのは，無用な反発を招く危険性もあり得策ではなかったはずである。すでに触れたように，中央から離れて軍事力を率いる都部署や節度使などは自由裁量権である便宜行事を認められており，警戒している人物をそのように配置するとは考えにくい。事実，太祖・太宗期に北辺・西北辺に配置された武将が，太祖・太宗との個人的結合を有していたことも指摘されている［山根 2014］。このように見れば，むしろ前代の旧臣たちが，ある時期まで軍事指揮官として軍事行動・軍事体制の中核を担っていたことの意味も無視できないのではないだろうか[32)]。

そこで改めて太祖・太宗期の軍事行動の陣容を見れば［**表 1**; **表 2**］，前代の旧臣たちが軍事指揮官として中核を担っている一方で，のちに軍事行動・軍事体制の中核を担うようになる側近・親信たちも従軍しているケースが頻見する。彼らは都監や鈐轄として従軍することも多く，都監・鈐轄は監軍としての役割を担うこともあったため［渡邊 1994; 1997］，こうした事例は前代の旧臣に対する監視・警戒・掣肘などと捉えられがちであるが，そこには別の意図もあったのではないだろうか。

例えば，太祖の重用を受けて活躍した曹彬は，後周時代にはほとんど実戦を経験していなかったが，北宋成立後には多くの軍事行動に参加しており，ここには実戦経験や功績を積ませるという太祖の意図があったことが指摘される［柳立言 1992］。また，見城氏に拠れば，太宗即位直後に党進・米信ら前代の旧臣たちが軍事行動を担っていたのは，「藩邸集団」のほとんどが実戦経験に乏しかったためだという［見城 2006］。これらに鑑みれば，太祖・太宗期の軍事指揮官が，前代の旧臣から側近・親信へと移行していく背景として，当時の北宋を取り巻く情勢の中で，豊富な戦歴や経験を有する前代の旧臣たちに頼りつつ，側近・親信にも実戦経験を積ませることで，次代の軍事指揮官の養成や世代交代を推し進めていったと想定できるのではないだろうか。

以上を念頭に置きながら，太祖・太宗と軍事指揮官たちの関係を探ってみれば，側近・親信のみならず，前代の旧臣との間にも，個人的紐帯や信頼関係の形成が見られることに気付くのである。

（2）太祖・太宗と軍事指揮官の個人的紐帯

太祖期では，例えば石守信・王審琦は太祖の「義社兄弟」であった[33)]。慕容延釗は太祖が後周の殿前都点検となってからも常に太祖から兄事を受け，太祖の即位後も兄と呼ばれていたという［『宋史』巻 251，慕容延釗伝］。また，韓令坤も「太祖（＝趙匡胤）と同に周室に事え，情好親密」［『宋史』巻 251，韓令坤伝］であったという。このような結びつきは後周時代においてすでに形成されていたと考えられるが，太祖の「義社兄弟」の中には太祖の側近・親信とされる劉廷讓・李継勲・韓重贇らも含まれる点には注意を要しよう。すなわち，太祖の「義社兄弟」という個人的紐帯は，前代の旧臣と側近・親信の双方を包含して形成されていたのである。

次に太宗期の軍事指揮官では，「藩邸集団」のほかには，例えば趙延溥が「開宝初，太祖晋陽に親征するに，太宗京邑を守り，延溥所部を以て帳下の牙軍と為る」［『宋史』巻 254，趙延溥伝］とあるように，太宗の即位以前からその麾下に入っていたことが分かる。また，李継隆は太祖の側近であった李処耘の子で，彼自身も太祖に抜擢されるが，太宗期においても「太宗朝に在りて特に親信を被り，征行する毎に，必ず委ぬるに機要を以てす」［『宋史』

巻257，李継隆伝］とあるように，太宗からも篤い信頼を得ていた。趙昌言も，開封尹時代の太宗によって父が管下の県令に任じられるとともに，彼自身も厚遇を受けたという［『宋史』巻267，趙昌言伝］。経歴は異なるものの，北漢併合に際して北宋に降った楊業も，太宗がかねてより麾下に加えたいと望んでおり，投降後には大いに信頼を得ていた［『宋史』巻272，楊業伝］。一方，太宗にとっての前代の旧臣に当たる劉遇・田重進・崔翰・曹彬らは，太宗からの信頼も篤かったことを列伝から確認することができる［cf. 陳峰2004］。また，潘美・崔彦進・劉廷讓・劉遇・李漢瓊などは，太祖の側近として太宗とともに「陳橋の変」を画策しており［温水1972］，太祖のみならず太宗の信任を得ていても不思議ではなかろう。

また，太祖・太宗がこれらの軍事指揮官との間に婚姻関係を結ぶ例も見られる。北宋皇帝・宗室と武将の婚姻については，近年尤東進氏［2016］が詳細に検討している。その整理に拠れば，太宗の淑徳尹皇后は尹崇珂の妹，懿徳符皇后は符彦卿の娘，符昭愿の妹，明徳李皇后は李処耘の娘，李継隆の妹である。また，公主あるいは宗室の女性を武将あるいはその一族が娶った例としては，太祖の妹・秦国大長公主を娶った高懐徳，魯国大長公主を娶った石保吉（石守信の子），魏国大長公主を娶った王承衍（王審琦の子），太宗の妹・揚国大長公主を娶った柴宗慶（柴禹錫の孫）が見え，さらに曹彬の子曹翊，韓重贇の子韓崇業，潘美の子潘惟熙，田重進の子田守信が，それぞれ太祖・太宗の弟である秦王趙廷美の娘を娶っている。氏は，太祖・太宗によるこのような武将との婚姻は，単に武将を軽視・抑制したのではなく，籠絡と警戒を両立する政策として実施され，「武」を有効に活用しようとする姿勢の表れであると指摘する［尤東進2016, pp. 102-106］。

以上のように，太祖・太宗期の軍事指揮官に任じられた前代の旧臣も，太祖・太宗との間に個人的紐帯や信頼関係を形成していた。この事実からは，太祖・太宗が前代の旧臣たちを単に警戒・排除しようとしたのではなく，側近・親信と同様に，即位前あるいは即位後に彼らとも結びつきを形成していたと考えられる。無論，前代の旧臣に対する太祖・太宗の警戒や，前代の旧臣からの反発もあったであろうが，五代各代において，そのような人材をも取り込みながら軍事力の掌握が図られていたことにも鑑みれば［堀1953］，北宋の太祖・太宗期に見える事例も，軍事力を掌握するために，警戒しつつも前代の旧臣たちを取り込もうとしたと捉えるべきであろう。そして，太祖・太宗期における統一戦争や三方の軍事的緊張の高まりという情勢に対して，前代の旧臣たちに頼りつつ対処しながら，同時に側近・親信にも経験を積ませ，次代の軍事指揮官の育成や世代交代の推進を意図していたと理解できるのである。

このように，太祖・太宗期の軍事行動・軍事体制の中核を担っていた軍事指揮官には，任用の傾向として前代の旧臣から側近・親信への移行が見られ，側近・親信のみならず前代の旧臣との間にも太祖・太宗との結びつきが形成されていた。すなわち，太祖・太宗期の軍事

指揮官は，軍事力・軍事行動を委ねるために信頼しうる人材が起用されていたと言える。そこには，前代から継承・吸収した旧臣たちと，自らの側近・親信らが併存しており，彼らを並行して任用していくといういわば“新陳代謝”によって，太祖・太宗期の北宋が抱えていた内外の軍事的課題の両立が企図されていたと考えられるだろう。

4　北宋の軍事基盤と沙陀王朝の系譜

北宋太祖・太宗期の軍事行動・軍事体制を支えた軍事指揮官の“新陳代謝”を可能にした歴史的背景は，いかなるものであったのだろうか。軍事指揮官の出自や父祖の事績を手がかりとして，最後にこの点を考えてみたい。

太祖・太宗期の軍事指揮官の出自や経歴，父祖の事績を見れば，まず着目すべきは，彼らの父祖あるいは彼ら自身が，北宋以前より，唐末・李克用軍団から後唐・後晋・後漢・後周へと続く「沙陀軍団」に属して軍事行動に従事していたという点であろう［**表3**; **表4**］。

太祖期の軍事指揮官で言えば，高懐徳・韓令坤・慕容延釗・王全斌・曹彬・潘美・尹崇珂・劉廷讓・何継筠・田欽祚らは，彼らの父が沙陀軍団に属していたのみならず，彼ら自身も北宋成立以前から沙陀軍団に属していた。また，石守信・王審琦・李継勲・崔彦進・党進・祁廷訓・司超も，彼ら自身がやはり北宋成立以前から沙陀軍団に属していた。

次に，太宗期の軍事指揮官で言えば，太祖期から軍事指揮官として軍事行動に従事していた曹彬・潘美・劉廷讓・崔彦進は，前述の通り北宋成立以前から沙陀軍団に属していた。また，趙延溥の父の趙晁，李継隆の父の李処耘，符昭愿の父の符彦卿は，いずれも五代期から沙陀軍団に属していた。さらに，張永徳・郭守文・曹翰・李漢瓊・劉遇・米信・田重進・劉廷翰・崔翰・郭進・劉福・安守忠・孔守正・田紹斌・范廷召・康保裔・楊重進・劉知信・劉文裕も，やはり父祖あるいは自らが北宋成立以前から沙陀軍団に属している。このほか，石保興・石保吉は石守信の子，王承衍は王審琦の子，慕容徳豊は慕容延釗の子，曹璨は曹彬の子である。経歴は異なるが，楊業も父祖以来沙陀軍団に属していた人物と言える。

さらに，これら太祖・太宗期の軍事指揮官の多くが，五代沙陀王朝の各皇帝の直接の麾下（帳下）に属していたという点も注目される。例えば，王景・王全斌は後唐荘宗（李存勗），司超・郭進は後漢高祖（劉知遠），石守信・王審琦・韓重贇・韓令坤・慕容延釗・李継勲・劉廷讓・崔彦進・祁廷訓・郭守文・劉遇・楊重進は後周太祖（郭威），曹彬・潘美・尹崇珂・曹翰・劉廷翰・劉福・田紹斌・范廷召は後周世宗（柴栄）の麾下にそれぞれ仕えている。周知の如く，北宋太祖趙匡胤も後周太祖（郭威）の帳下に仕えており［『宋史』巻1，太祖本紀］，石守信らとは同輩であった。彼らは各皇帝が即位する以前から麾下に入り，即位後に重く用いられているものが多く，その側近性を窺い知ることができる。

また，太祖・太宗期の軍事指揮官には，非漢人・遊牧系である，あるいはそれと思しき人物も多く見出すことができる。例えば，慕容延釗・慕容徳豊父子はその姓から吐谷渾（吐渾）系と考えられるし，楊承信は沙陀部［『宋史』巻252，楊承信伝］，米信は奚族であり[34]［『宋史』巻260，米信伝］，党進も「渓戎」と言われ奚族と考えられる［陳峰2004］。何継筠や安守忠はソグド系突厥であり［森部2010］，石曦も後晋・石敬瑭の弟・石暉の子である［『宋史』巻271，石曦伝］。このほか，王審琦・王承衍父子は先祖が「遼西」出身であり［『宋史』巻250，王審琦伝］，非漢人の出自である可能性は高いだろう。楊業も沙陀系である可能性が指摘されている［飯山2011, pp. 111-112, 123］。ソグド姓を有する石守信・石保興・石保吉，曹彬・曹璨，曹翰，康保裔，翟守素，曹思進などもソグド系である可能性があり[35]，さらに唐末五代宋初には一般的な漢姓を有する非漢人・遊牧系武人も多く見られることに鑑みれば[36]，他にもそのような例はあるだろう。

さらに，軍事指揮官の出身地についても共通点を指摘することができる。何冠環氏に拠れば北宋前期の武人・武将の出身地は河北・山西・河南地域が多く，当時は北宋の領域ではなかった燕雲地域を出身地あるいは故郷とするものも見られる［何冠環2003, pp. 21-23[37]］。軍事指揮官に限って見てもこの傾向はおおむね当てはまると言えるが［**表3**; **表4**］，とりわけ河北地域出身者が群を抜いて多い。

何冠環氏は，各地域からの武人・武将輩出の背景として，河南が京畿周辺であること，河北・山西が唐中期以来，北方の軍事的要衝であり戦乱が続いていたことをそれぞれ指摘する。

河北・山西地域は，対北漢・契丹の前線地域に当たり，行営や都部署の活動・管轄する地域として実際の戦闘も想定されていたはずである。また，太宗期に防衛を主たる目的として行営や都部署が配置された地域は，それぞれ契丹が中国へ進軍するルートの要地に当たる［松井1918］。太祖・太宗期に限らず，実際の戦場となる地域の地理などに通じている人物が軍事指揮官の人材として重視されるのは至極当然のことであり，河北・山西出身者が多く任用されているのも，このような事情によるのであろう。河南出身者については，五代沙陀王朝が山西（後唐・後晋・後漢）や河北（後周）に拠っていた藩鎮から興り，河南の洛陽や開封に都を定めたため，麾下の集団も付き従って洛陽・開封に移ったという歴史的経緯による影響もあるのであろう。一方，対西夏・対大越前線に当たる西北方・南方出身者が少ない，あるいはほとんど見られないのは，五代沙陀王朝の系譜に連なる北宋が北中国を基盤としていたという歴史展開と，太祖・太宗期の最重要課題はあくまでも契丹対策であったということが要因であろう。

以上より，北宋太祖・太宗期の軍事指揮官の多くには，沙陀軍団の系譜に連なること，河北・山西・河南地域出身であるという共通点を見出すことができ，その中にはさらに非漢

人・遊牧系の武人も含まれていた。このような事実を踏まえ，太祖・太宗期の軍事指揮官の“新陳代謝”を可能とした歴史的背景を考えれば，近年の研究により明らかになっている，八世紀半ばの安史の乱以降の北中国や“農牧接壌地帯”における遊牧民集団の活動との関わりやその影響が想起される。

農牧接壌地帯とは，ユーラシア大陸のおおよそ北緯30度～40度地帯を東西に長く貫く，農耕と牧畜・遊牧が混淆可能な地域であり，農耕民と牧畜・遊牧民が雑居する地域である。中国周辺では，現在の河北省北部・山西省北部から甘粛省に至る地域を含む。この地域は次代の歴史を動かす原動力となる集団が勢力を築く揺籃の地と評価され，ここで勢力を蓄えた集団が北へ，あるいは南へ進出・拡大し，時として「中国」史にも大きな影響を与えるとされる[38)]。そして，その原動力とは言うまでもなく軍事力のことであり，換言すれば農牧接壌地帯は軍事力の供給源としての役割を果たしていたのである。

八世紀半ばの安史の乱以降，河北・山西・燕雲地域には，歴代節度使が非漢人・遊牧系の武人であったり，遊牧民集団を軍事力の中核とする「河北藩鎮[39)]」が割拠する。この河北藩鎮は，成徳・魏博・盧龍のいわゆる「河朔三鎮」をはじめとして，安史軍の流れを継承しており，安禄山の影響が色濃く残っていたと言える［新見2012］。その安史軍は，ソグド・ソグド系突厥・契丹・奚など多くの遊牧集団から成り立っており，安史の乱後にはそれに加えて北方・西方から様々な遊牧集団が北中国へ流入し，彼らが河北藩鎮の軍事基盤となっていた［森部2010］。唐末に代北から興起した沙陀は，もともと「代北五部」と称される沙陀・吐谷渾・契苾の集団を中核としており[40)]，そこにソグドやソグド系突厥が合流し，また成徳・魏博藩鎮を吸収することで勢力を河北・中原へと拡大し，朱全忠（＝後梁）や契丹との抗争を経て，後唐以後の沙陀王朝，さらには北宋の成立へと至るのである。

こうした歴史展開を踏まえれば，北宋軍事力の基盤は直接的には沙陀軍団に起源し，さらには八世紀後半のユーラシア東方における遊牧集団の活動に遡ることができよう。北宋太祖・太宗期の武人・武将には，「騎射を善くす」などと称されるものが散見するが［**表3**; **表4**］，このような資質は彼らを輩出した農牧接壌地帯という地域的特性や，唐末五代以来の歴史展開の中で涵養されたものと考えられるだろう。すなわち，八世紀後半から十世紀末に至るまでのユーラシア東方における歴史展開は，北宋太祖・太宗期の軍事行動・軍事体制の中核を担い支えた軍事指揮官の“新陳代謝”を可能ならしめた要因の一端とみなすことができるのではないだろうか。

おわりに

北宋の太祖・太宗期は，「中国」の再統一へ向けた軍事行動や契丹・大越・タングートと

の軍事衝突と，北宋政権の安定や太祖・太宗の権力基盤の確立という，内外の軍事的課題に直面していた。かかる状況下にあって，軍事行動や軍事体制においては軍事指揮官とりわけ都部署と彼らが統轄する行営の軍事力が中核として機能していた。そして，都部署をはじめとする軍事指揮官には，太祖や太宗との間に個人的な結びつきを有する人材が任用され，このような任用を介して太祖・太宗による軍事力掌握延いては権力基盤の確立・安定が図られていたのであろう。そこには，側近・親信のみならず前代の旧臣も含まれており，彼らを継承・吸収することで，軍事行動・軍事体制を担う人材の“新陳代謝”が行われていたのである。

また，このような軍事指揮官の多くは，唐末五代の沙陀軍団の系譜に連なる武人であり，さらには河北・山西出身者や非漢人・遊牧系に武人も多く見られる。このような人材が北宋太祖・太宗期の軍事情勢を支えることができた背景には，八世紀後半以降の農牧接壌地帯を舞台とする遊牧集団の活動があったのである[41)]。

近年，中央ユーラシア史の視点から，十世紀前後にユーラシアの東西に林立した「征服王朝（中央ユーラシア型国家）」に先行する「早すぎた征服王朝」として安史の乱を再評価しようとする見方がある［森安 2007; 2015; 森部 2013］。ここでいう「征服王朝」とは，遊牧民の軍事力とオアシス民の経済力を基盤としつつ，軍事的支配制度・税制・人材登用制度・文書行政など，大人口の農耕地帯を支配するためのノウハウを完成させた国家であり，具体的には契丹や沙陀系王朝も想定されている［森安 2007; 2015］。安史の乱ではこのようなノウハウの完成には至らなかったが，河北藩鎮を経て契丹や沙陀王朝へこうしたノウハウが継承されたと考えられる［森部2013］。無論，北宋は征服王朝として数えられるわけではないが，軍事力の基盤という点に着目すれば，北宋も安史の乱の流れを汲むものとして位置付けることができるのである[42)]。

安史の乱を起点として北宋太祖・太宗期へと至るこのような軍事力の系譜は，さらに真宗景徳年間まで続くと考えられる。真宗期の対契丹戦線や対タングート戦線においても行営を率いる都部署が頻見し，そこには太宗の藩邸集団などの前代の旧臣と，真宗自身の藩邸集団をはじめとする側近・親信が併存しており，沙陀軍団の系譜に連なる人物も見える[43)]。その後，真宗景徳年間の三方における緊張の緩和・解消や対タングート前線である西北辺地域への軍事的重心の移行が見られ，これは北宋初期に武人・武将が輩出した将門の杜絶や河北・山西地域出身の武人の衰退などと軌を一にしたものとみなすことができる。従来，こうした変化は「以文制武」すなわち文治主義の確立などと評価されてきたが，西北辺地域へ軍事的重心が移行していく北宋中期以降には西北辺地域出身者の武人が増加して新たな将門も台頭すること［陳峰 2004; 何冠環 2003; 曽瑞龍 2010］や，西北辺地域が北宋の軍事的先進地域となっていくこと［伊藤 2011］などを考えると，景徳年間を画期とする北宋を取り巻く国際情勢の大きな変化とともに軍事基盤も西北辺地域へと移動したと捉えることができよ

う。すなわち，「中国」史の展開を支えた軍事力の系譜という観点に立てば，八世紀半ばの安史の乱から十一世紀初頭の澶淵体制の成立までの時期を，ひとつの大きな流れとして位置付けることができ[44]，このような流れは中央ユーラシア史の展開と不可分なものとして理解すべきなのである。

ところで，北宋の軍事制度は，枢密院と三衙による兵権の分掌と，その上に君臨する皇帝という仕組みによって，軍事力の中央集権が実現されたと理解されるが，本稿の検討に拠れば，太祖・太宗期についてはそのようなシステムではなく，個々の武人・軍事指揮官と皇帝との関係に基づいて軍事力の掌握がなされていたと理解できる。また，筆者は三衙の管軍や都部署は，枢密院や三司の掣肘を受けていたのではなく，むしろ一体となって太祖・太宗の権力基盤の確立・安定に寄与していたのではないかと考えているが，これらについては今後の課題としたい。

注

1）澶淵の盟の成立を契機として，諸勢力間における盟約の締結に基づく関係と，その遵守・維持のための様々な仕組みが成立し，「澶淵体制」や「盟約の時代」「盟誓体制」などと称される，ユーラシア東方の国際情勢における多国併存状況が現出する。その中で契丹が優位に立つ契丹―北宋関係が主軸となり，それは金―南宋関係にも変化を伴いながら継承されていく。このような国際関係をめぐる研究は非常に多いが，ここでは古松 2007; 2011; 毛利 2008; 井黒 2010; 金成奎 2015; 山崎 2017 を挙げておく。

2）契丹・タングート（西夏）・大越と対峙する地域は「三方の急」として軍事的に重要視されていた［金成奎 2000, pp. 14-15］。また，北宋の財政政策に与える軍事情勢の影響はとりわけ大きく，宋一代を通じて財政支出の 8 割，時には 9 割を軍事費が占めるほどの「戦時財政」であり，宋代の財政政策はほぼ軍費の調達のために立案・実施されていたと言われる［曽我部 1941; 汪聖鐸 1995; 古松 2013］。

3）北宋初期の軍事政策については，堀 1953, pp. 127-147; 羅球慶 1957, pp. 172-193; 聶崇岐 1980; 王曽瑜 1983; 張徳宗 1983 などを参照。なお，後述するように近年の宋代軍事史研究の成果により，このような中央集権・文治主義を前提とする見方に見直しが迫られており，諸政策の時期・規模・徹底性などについて再検討する必要性も提起されている。

4）例えば小岩井弘光氏は「まことに宋代兵制の考察は今後とも中央集権体制理解のために必要欠くべからざるものといえよう」と述べている［1998, p. 9］。なお，このような傾向は日本の宋代政治史研究が中央集権や君主独裁・文治主義の解明に注力していたこととも無関係ではないだろう［cf. 平田 2008］。

5）近年の中国・台湾における宋代軍事史研究は陸続と発表されているが，そのまとまった整理とし

ては范学輝 2015 を参照。北宋の武人・武将や将門については，全面的に分析・整理したものとして何冠環 2003; 陳峰 2004 があり，個々の武人・武将や将門に着目したものに柳立言 1992; 曽瑞龍 2010; 何冠環 2013 などがある。また，北宋の軍事を再評価しようとするものとしては，陳峰 2004; 趙冬梅 2010; 范学輝 2015 などがある。

6）例えば，飯山ほか 2009 において「中華と周辺という根強い枠組み自体を，「宋代」ならぬ 10 ～ 13 世紀の東ユーラシアにおいて解体し，宋朝の支配領域における国家と社会の歴史的様相を，他の政治権力の支配領域との相互関連も含めて問い直す視点こそ求められよう」［pp. 2-3］と提言されている。

7）唐宋変革論をめぐる近年の研究動向については妹尾 2007; 青木 2014 などを参照。

8）ここで言う「沙陀（系）王朝」とは，単に支配者が沙陀系であること，あるいは遊牧国家であることなどを主張するものではない。冨田孔明氏は，後唐・後晋・後漢の創始者（李存勗・石敬瑭・劉知遠）がそれぞれ沙陀系であること，五代各皇帝あるいはその祖が李克用軍団に属していたこと，李克用軍団に属していた武将やその後裔がその後の五代諸王朝で重んじられていたこと，の三点に基づき，李克用軍団から後周に至る連続性を指摘する［冨田 1986, pp. 84-89］。また，氏は，北宋の二府（中書門下省と枢密院）の起源が李克用藩鎮に遡ることを明らかにし，李克用藩鎮から後唐・後晋・後漢・後周を経て北宋に至る政権の連続性を指摘する［冨田 1989; 1991; 1994］。すなわち，「沙陀（系）王朝」とは，唐末の沙陀・李克用軍団から軍事力や政権構造を継承している一連の王朝を指すものである。なお，北漢も後漢から分離した沙陀王朝として捉えられるだろう。

9）墓誌などの石刻史料を中心に沙陀・ソグド系突厥・吐谷渾などの活動を明らかにしているのは森部豊氏の一連の研究である［森部 2010 所収］。このほか，唐末五代期における沙陀・ソグドなどについては樊文礼 2000; 蔡家芸 2004; 西村 2008; 陳瑋 2015 など多くの研究成果がある。また，尤東進 2012 は北宋禁軍における沙陀・ソグドを含む「異族兵」を取り上げている。

10）例えば太平興国五年（980）十二月には再度の幽州攻撃が計画されたが，李昉・扈蒙の反対により実行されなかった［『長編』巻 21，太平興国五年十二月戊寅］。

11）二度に亘る北宋の北伐やその間の北宋―契丹関係の推移については，田村 1964, pp. 169-195; 程光裕 1972; 陶晋生 1984; 廖隆盛 2002; 曽瑞龍 2003 などを参照。

12）大越の「独立」やこの時期の政治情勢，北宋との関係については山本 1943; 杉本 1956, pp. 87-91; 河原 1984, pp. 253-312; 桃木 2011, pp. 7-12 などを参照。また，宋越戦争の詳しい経緯は河原 1984, pp. 276-312 を参照。

13）李継遷の動向や契丹・北宋との関係については，岡崎 1972, pp. 173-219; 田村 1964, pp. 196-222; 李華端 1998, pp. 21-39; 岩﨑 2012; 2015; 2017; 楊浣 2010 などを参照。

14）景徳元年正月には，西涼府（涼州）のチベット系・潘羅支政権を攻撃した李継遷が反撃に遭い戦死し，跡を継いだ李徳明が景徳三年（1006）に北宋との和約を選択して西方への拡大路線へと転

換する。また，北宋による大越遠征の後，黎桓を節度使に封じたことで前黎朝が確立したものの，黎桓死後に諸子による内乱が生じており，最終的には内乱の終結後の景徳四年（1007）に北宋への遣使朝貢と北宋からの冊封承認が行われる。

15）**表1**，**表2**は『宋会要輯稿』兵7および兵8に依拠し，適宜『長編』などの他史料に拠って補っている。なお，都部署は北宋第5代英宗の諱である「曙」を避けて嘉祐八年（1063）に都総管に改められる（副都部署，部署，副部署なども同様）。そのため，『宋会要輯稿』では英宗期以前の記事でも都総管と記されているが，本稿では史料本文の引用を除き，都部署と表記する。なお史料によっては都部管・都部轄などと表現する例もあるが，同様に扱う。

16）張邦煒・杜桂英 2006 は北宋の軍事体制を「枢密院―三衙―都部署体制」と評している。なお，北宋中期の仁宗期に経略安撫使体制が確立することで，都部署は文臣の経略安撫使が兼任することとなり，経略安撫使体制に包摂されていく。経略安撫使体制については，李昌憲 1997 や渡邊 1999 に詳しい。

17）その他には，儀仗都部署や山陵都部署などが見られる。

18）蜀主孟昶の降伏後も，全師雄が軍勢を率いて反宋活動を行っており，王全斌らはその対応のために四川に残っており，その間にも「西川行営」は解体されずにいたことが分かる。最終的に鎮圧されるのは乾徳四年の後半であった。

19）このような行営の在り方は，唐代前期の行軍と類似しており，興味深い。唐代の行軍については，菊池 1961; 1962; 孫継民 1995 などを参照。

20）『長編』巻 17，開宝九年十一月庚午，李燾注に，契丹への備えとして関南（高陽関）に李漢超，瀛州に馬仁瑀，常山に韓令坤，易州に賀惟忠，棣州に何継筠を，北漢への備えとして西山に郭進，晋州に武守琪，隰州に李謙溥，昭義に李継勲を，西戎（＝タングート）への備えとして延州に趙賛，慶州に姚内斌，環州に董遵誨，原州に王彦昇，霊武に馮継業をそれぞれ駐屯させていることが見える。

21）李継勲は乾徳六年の北漢討伐に編制された河東道行営に，昭義軍節度使を帯びて河東行営前軍都部署として参加して行営を率いており，郭進は開宝九年の北漢討伐に編制された河東道行営に，鎮州西山巡検・洺州防禦使を帯びて河東道忻代等州行営馬歩軍都監として参加している［**表1**］。

22）太原攻城戦に際して，『宋会要輯稿』兵 7 では崔彦進・李漢瓊・曹翰・劉遇が東西南北の洞子頭車壕寨使として登場するが［**表 2**］，このうち『宋史』の各列伝では李漢瓊と曹翰が攻城都部署とされている。

23）なお太平興国五年十二月に計画された契丹攻撃においても，保静軍節度使の劉遇を幽州西路行営壕寨兵馬都部署，睦州團練使の田欽祚を都監，威塞節度使の曹翰を幽州東路行営壕寨兵馬部署，登州防禦使の趙延溥を都監に任じ，行営の編制と都部署の任用が見られる［『宋会要輯稿』蕃夷 1，契丹，太平興国五年;『長編』巻21，太平興国五年十二月戊寅］。

24）『宋会要輯稿』兵 8 および蕃夷 4，ならびに『長編』巻 21 などの諸史料では，邕州路兵馬都部署には蘭州団練使の孫全興，八作使の郝守濬，鞍轡庫使の陳欽祚，左監門衛将軍の崔亮が，廉州路兵馬都部署には寧州刺史の劉澄，軍器庫副使の賈湜，供奉官・閤門祗候の王僎が，それぞれまとめて任用されたように記しているが，『宋会要輯稿』蕃夷 4，交趾，太平興国六年十一月には「交州行営総管・蘭州団練使孫全興」と登場するので，邕州路・廉州路ともに最初に名前の挙がっている孫全興と劉澄が各都部署の任にあったと解すべきかと思われる。なお，行営軍の実質的なトップは大越遠征を主張して交州路水陸計度転運使に任じられた侯仁宝であろう。

25）『長編』ではこれに関しては趙昌言が川峡両路都部署に任じられたとある［『長編』巻 36，淳化五年八月丁酉］。

26）例えば趙冬梅氏は，都部署の性格が変化する以前については，太平興国四年の北漢討伐における陣容を例として分析している［趙冬梅 2004］。

27）都部署には「北面」「南面」，あるいは「〇〇路（道）」「〇〇州路（道）」「〇〇州」などが冠せられ，その活動・管轄範囲が示されるが，必ずしも既定の地方区画と一致するわけではない。また，この範囲は一州・一路（道）から複数州・複数路（道）に至るまで多様である。おおよその傾向としては，討伐・遠征の際には「〇〇路（道）」が冠せられ「〇〇方面」を意味し，防衛・駐屯の際には，「〇〇州」（あるいは「并代」「鎮定」などのように州名の並列）となって，基本的には州を単位とした範囲であったと言えよう。

28）枢密院の長貳については梁天錫 1981; 陳峰 2004; 范学輝 2015，三司の長貳については周藤 1969; 見城 2001; 宮崎 2010 などを参照。

29）**表 3**，**表 4** には太祖・太宗期にそれぞれ都部署などに任用された人物を，その任用事例とともにまとめている。まず『宋史』の各列伝に依拠し，適宜他史料から情報を補っている。なお，副都部署や部署・副部署も場合によっては都部署の職掌を担うことがあり，また，史料中ではしばしば「都」字が落ちてしまうこともあるため，ここでは都部署のみならず副都部署・部署・副部署の事例も併せて収集している。

30）温水氏は，「陳橋の変」を画策し太祖推戴に関わった中心的な人物として，李処耘・趙普・太宗を挙げており，さらには後周の殿前都点検であった太祖の掌握する殿前軍に属する武将を太祖の側近・股肱とみなしている［温水 1972, pp. 50-55］。具体的には上記三名のほか，潘美・王彦昇・馬仁瑀・李漢超・羅彦瓌・張廷翰・崔彦進・韓重贇・馬全義・劉廷讓・党進が挙げられ，さらに建隆元年前後の職掌から，楊信・劉遇・李漢忠・李漢瓊・張瓊・李進卿らも太祖の推戴に関わったとする。

31）太宗の「藩邸集団」については，見城氏が詳細に検討している［見城 2005; 2006］。また，陳峰氏も北宋の武人の出身として各皇帝の「藩邸集団」に着目し，太宗の藩邸集団も分析している［陳峰 2004］。

32）陳峰氏も太祖期の武人が前代の旧臣から側近・親信へと移行するという傾向を見出しているが，旧臣たちへの警戒・排除というよりは，ともに北宋の成立や太祖の即位に大きく貢献した「開国将領」として位置づけている［陳峰2004］。

33）『宋朝事実』巻9，勲臣に記される太祖の「義社兄弟」は，楊光義（楊光美）・石守信・李継勲・王審琦・劉慶義・劉守忠・劉廷讓（劉光義）・韓重斌［贇］・王政忠である。このち，石守信・李継勲・王審琦・劉廷讓・韓重贇が太祖・太宗期に都部署に任じられるほか，楊光義・王政忠も軍事行動に従事していたことが確認できる。

34）なお，米信はその姓からソグド系でもあると考えられる。ソグド人と奚の間の婚姻関係は唐後半期以降頻繁に見られるので，米信もソグド人と結びついた奚，あるいは奚と結びついたソグド人であろう。ソグド人と奚については森部2011参照。

35）ソグド姓とは，安・康・米・石・史・何・曹・翟など中国に入ったソグド人が出身オアシスの漢字表記に基づいて名乗るようになった漢字姓を指す。ソグド姓については福島 2005; 斉藤 2009; 森部 2010, pp. 22-26 を参照。なお，福島氏が述べるようにソグド姓を有していることのみをもってソグド人あるいはソグド系であると断ずることができるわけではないが，ここでは可能性として指摘しておく。なお，曹彬については西村陽子氏がソグド系の可能性が高いことを指摘している［西村2018, pp. 190-191］。

36）宋初の非漢人・遊牧系の武人については，蔡家芸2004; 森部2010; 尤東進2012なども参照。

37）何冠環氏は太祖・太宗・真宗期の武人約 1300 人のうち，出身地不明の 500 人余りを除いて出身地を整理し，河北出身が34%（259人），河南出身が22%（166人），山西出身が26%（197人）という比率を出している。また，より細かい出身を見れば，太原・開封・洛陽・真定・大名で約40%（300人）を数えるという。

38）農牧接壌地帯の概要や歴史的意義については，石見 1999; 妹尾 2001; 2018; 森安 2007; 2015; 森部 2010 などを参照。なお，「農牧接壌地帯」は森安 2007 に拠る呼称であり，ほかに「リザーヴァー」「ベルト状地帯」［石見1999］や「農業＝牧畜境界地帯」［妹尾2001; 2018］といった呼称も見られる。本稿では農牧接壌地帯で統一する。なお，農牧接壌地帯をめぐる研究状況については，鈴木 2011 に簡潔な整理がある。

39）「河北藩鎮」とは，盧龍・横海・成徳・魏博・昭義・河中・河東節度使を指す［森部2010］。

40）この「代北五部」が「沙陀三部落」すなわち沙陀・薩葛・安慶と，吐谷渾（退渾／吐渾）・契苾の五つの集団を指すことは，西村2008で明確に示されている［pp. 2-6］。

41）農牧接壌地帯を軍事力の供給源としていたのは，無論北宋だけではない。契丹もこの地域から軍事力を確保しており，燕雲十六州をはじめとする契丹―北宋間の農牧接壌地帯は，双方にとっての軍事力の供給源であり，かつ軍事力の争奪戦が展開される場でもあった。このような契丹―北宋間における燕雲十六州の意義を再検討したのが渡邊2017である。

42）さらに遡れば，7 世紀末葉に農牧接壌地帯で活動した突厥第二可汗国も「早すぎた征服王朝」として位置づけることが可能という［鈴木 2011］。また，安史軍の形成自体も 630 年の突厥第一可汗国崩壊以来のユーラシア規模の歴史展開の影響も受けている。

43）例えば，真宗期に対契丹戦線や対タングート戦線において活躍した王昭遠・傅潛は太宗期から都部署を歴任していた，太宗の藩邸集団であった。

44）北中国の歴史展開や遊牧集団の動向を踏まえつつ，安史の乱から澶淵の盟に至る時期を捉えようとするものとして，例えば張広達2008などがある。

文献目録（著者名 50 音順）

青木　敦　2014「宋朝の定位二：近世論と唐宋変革論」青木敦『宋代民事法の世界』慶應義塾大学出版会，pp. 313-357.（初出：「南北支那論と唐宋変革論における宋朝の定位：学説史的再検討」『乾止人文学』4，2010 年／「ユーラシアの近世・中国の近世」『歴史評論』763，2013年）

飯山　知保　2011『金元時代の華北社会と科挙制度：もうひとつの「士人層」』早稲田大学出版部.

飯山知保・久保田和男・高井康典行・山崎覚士・山根直生
2009「『宋代中国』の相対化」宋代史研究会（編）『『宋代中国』の相対化』汲古書院，pp. 1-11.

井黒　忍　2010「金初の外交史料に見るユーラシア東方の国際関係：『大金弔伐録』の検討を中心に」荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉（編）『遼金西夏研究の現在』3，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 31-45.

伊藤　一馬　2011「北宋における将兵制成立と陝西地域：対外情勢をめぐって」『史学雑誌』120-6，pp. 39-61.

岩﨑　力　2012「李継遷の登場：李継遷の建国運動始末（その一）」『中央大学アジア史研究』36，pp. 23-64.

岩﨑　力　2015「李継遷の外交戦略：李継遷の建国運動始末（その二）」『中央大学アジア史研究』39，pp. 1-44.

岩﨑　力　2017「李継遷の苦闘（上）：李継遷の建国運動始末（その三）」『中央大学アジア史研究』41，pp. 185-209.

石見　清裕　1999「ラティモアの辺境論と漢～唐間の中国北辺」唐代史研究会（編）『東アジア史における国家と地域』刀水書房，pp. 278-299.

汪　聖鐸　1995『両宋財政史』上・下，中華書局.

王　曽瑜　1983『宋朝兵制初探』中華書局.（増補：『宋朝軍制初探（増訂本）』中華書局，2011年）

岡崎　精郎　1972『タングート古代史研究』東洋史研究会.

何　冠環　2003『北宋武将研究』中華書局（香港）有限公司.

何　冠環　2013『攀龍附鳳：北宋潞州上党李氏外戚将門研究』中華書局（香港）有限公司.

河原　正博　1984『漢民族華南発展史研究』吉川弘文館.

菊池　英夫　1961「節度使制確立以前における「軍」制度の展開」『東洋学報』44-2，pp. 54-88.

菊池　英夫　1962「節度使制確立以前における「軍」制度の展開（続編）」『東洋学報』45-1，pp. 33-68.

金　成奎　2000『宋代の西北問題と異民族政策』汲古書院.

金　成奎／洪　性珉（訳）
2015「誓書：10－13世紀東アジアの安全保障策」『史滴』37，pp. 7-28.

見城　光威　2001「宋初の三司について：宋初政権の一側面」『集刊東洋学』86，pp. 21-41.

見城　光威　2005「宋太宗政権考（上）：唐宋変革期政治史研究の一つの試み」『東北大学文学研究科研究年報』55，pp. 29-63.

見城　光威　2006「宋太宗政権考（中）：唐宋変革期政治史研究の一つの試み」『東北大学文学研究科年報』56，pp. 61-86.

呉　天墀　2006『西夏史稿』広西師範大学出版社.（初版：1980年）

小岩井弘光　1998『宋代兵制史の研究』汲古書院.

蔡　家芸　2004「遼宋金夏境内的沙陀族遺民」『民族研究』2004-5，pp. 73-81.

斉藤　達也　2009「北朝・隋唐史料に見えるソグド姓の成立について」『史学雑誌』118-12，pp. 38-63.

聶　崇岐　1980「論宋太祖収兵権」聶崇岐『宋史叢考』上，中華書局，pp. 263-282.（初出：『燕京学報』34，1948年）

杉本直治郎　1956「五代宋初に於ける安南の土豪呉氏に就いて：安南の独立に関する一見解」『東南アジア史研究』Ⅰ，日本学術振興会，pp. 43-91.（初出：『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』弘文堂書房，1926年）

鈴木　宏節　2011「唐代漠南における突厥可汗国の復興と展開」『東洋史研究』71-1，pp. 35-66.

周藤　吉之　1969「北宋の三司の性格：節度使体制と関聯させて」周藤吉之『宋代史研究』東洋文庫，pp. 79-144.（初出：『法政史学』18，1965年）

妹尾　達彦　2001『長安の都市計画』講談社.

妹尾　達彦　2007「世界史の時期区分と唐宋変革論」『中央大学文学部紀要』216（史学52），pp. 19-68.

妹尾　達彦　2018『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部.

曽　瑞龍　2003『経略幽燕：宋遼戦争軍事災難的戦略分析』中文大学出版社.

曽　瑞龍　2010『北宋种氏将門之形成』中華書局.

曽我部静雄　1941『宋代財政史』生活社.

孫　継民　1995『唐代行軍制度研究』文津出版社.

田村　実造　1964『中国征服王朝の研究』上，東洋史研究会.

張　広達　2008「従「安史之乱」到「澶淵之盟」：唐宋変革之際的中原和北方」黄寛重（主編）『基調与変奏：七至二十世紀的中国』国立政治大学歴史学系，pp. 1-20.

趙　冬梅　2004「北宋前期地方統兵体制研究」『文史』2004-3，pp. 25-47.

趙　冬梅　2010『文武之間：北宋武選官研究』北京大学出版社.

張　徳宗　1983「北宋的禁兵制度」中州書画社（編）『宋史論集』中州書画社，pp. 202-215.

張　邦煒・杜　桂英
2006「五代北宋前期都部署問題探討」朱瑞熙等（主編）『宋史研究論文集』第 11 輯，巴蜀書社，pp. 35-60.

陳　瑋　2015「中古時期党項与粟特関係論考」『中国史研究』2015-4，pp. 67-92.

陳　峰　2001「都部署与武将地位的変遷」『安徽師範大学学報（人文社会科学版）』29-3，pp. 416-420.

陳　峰　2004『北宋武将群体与相関問題研究』中華書局.

程　光裕　1972『宋太宗対遼戦争考』台湾商務印書館.

陶　晋生　1984『宋遼関係史研究』聯経出版事業公司.（再版：中華書局，2008年）

冨田　孔明　1986「五代の禁軍構成に関する一考察：李克用軍団の変遷について」『東洋史苑』26/27，pp. 83-115.

冨田　孔明　1989「五代の枢密使：その沿革についての新たな考察」『龍谷史壇』95，pp. 46-64.

冨田　孔明　1991「宋二府の沿革に関する考察：その起点と転換点を明確にして」『東洋史苑』37，pp. 25-37.

冨田　孔明　1994「宋二府の沿革に関する考察（続）：五代宋における二種の相質について」『東洋史苑』40/41，pp. 74-95.

新見まどか　2012「唐代後半期における「華北東部藩鎮連合体」」『東方学』123，pp. 20-35.

西村　陽子　2008「唐末五代の代北における沙陀集団の内部構造と代北水運使：「契苾通墓誌銘」の分析を中心として」『内陸アジア史研究』23，pp. 1-24.（再録：西村2018）

西村　陽子　2018『唐代沙陀突厥史の研究』汲古書院，

温水　三男　1972「北宋政権樹立考：主に建国期の禁軍改編を中心として」『待兼山論叢』（史学篇）5，pp. 45-69.

范　学輝　2015『宋代三衙管軍制度研究』上・下，中華書局.

樊　文礼　2000『唐末五代的代北集団』中国文聯出版社.

平田　茂樹　2008「日本の宋代政治史研究の新たな可能性：国家史・国制史研究との対話を求めて」『中国史学』18，pp. 141-158.（改題再録：平田茂樹『宋代政治構造研究』汲古書院，2012年）

福島　恵　2005「唐代ソグド人墓誌の基礎的考察」『学習院史学』43，pp. 135-162.（再録：福島恵『東

部ユーラシアのソグド人：ソグド人漢文墓誌の研究』汲古書院，2017年）
古松　崇志　2007「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』90-1，pp. 28-61.
古松　崇志　2011「10～13世紀多国並存時代のユーラシア（Eurasia）東方における国際関係」『中国史学』21，pp. 113-130.
古松　崇志　2013「宋遼金～元：北方からの衝撃と経済重心の南遷（10～14世紀）」岡本隆司（編）『中国経済史』名古屋大学出版会，pp. 131-162.
堀　敏一　1953「五代宋初における禁軍の発展」『東洋文化研究所紀要』4，pp. 83-151.
松井　等　1918「宋対契丹の戦略地理」『満鮮地理歴史研究報告』4，pp. 67-129.
宮崎　聖明　2010「北宋の三司使・戸部尚書人事と経歴」宮崎聖明『宋代官僚制度の研究』北海道大学出版会，pp. 25-68.（初出：『北大史学』38，1998年）
毛利　英介　2008「1099年における宋夏元符和議と遼宋事前交渉：遼宋並存期における国際秩序の研究」『東方学報』82，pp. 119-167.
桃木　至朗　2011『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会.
森部　豊　2010『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部.
森部　豊　2011「安禄山女婿李献誠考」『関西大学東西学術研究所創立60周年記念論文集』関西大学出版部，pp. 243-267.
森部　豊　2013『安禄山：「安史の乱」を起こしたソグド人』山川出版社.
森安　孝夫　2007『シルクロードと唐帝国』講談社.
森安　孝夫　2015「ウイグルから見た安史の乱」森安孝夫『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会，pp. 2-48.（初出：『内陸アジア言語の研究』17，2002年）
山崎　覚士　2017「帝国の中世：中華帝国論のはざま」渡辺信一郎・西村成雄（編）『中国の国家体制をどうみるか：伝統と近代』汲古書院，pp. 187-208.
山根　直生　2014「唐宋両朝の地理的様態と境界：州等差の分析から」『史学研究』285，pp. 25-53.
山本　達郎　1943「安南が独立国を形成したる過程の研究」『東洋文化研究所紀要』1，pp. 1-90.
尤　東進　2012「北宋禁軍における「異族兵」について」『史滴』34，pp. 97-119.
尤　東進　2016「北宋における武将の婚姻」『宋代史から考える』汲古書院，pp. 81-110.
楊　浣　2010『遼夏関係史』人民出版社.
羅　球慶　1957「北宋兵制研究」『新亜学報』3-1，pp. 169-270.
李　華瑞　1998『宋夏関係史』河北人民出版社.
李　昌憲　1997「宋代安撫使制度」李昌憲『宋代安撫使考』斉魯書社，pp. 1-51.
柳　立言　1992「宋初一個武将家族的興起：真定曹氏」中央研究院歴史語言研究所（編）『中国近世社会文化史論文集』台湾商務印書館，pp. 39-88.
梁　天錫　1981『宋枢密院制度』上・下，黎明文化事業公司.

廖　隆盛　　2002『国策・貿易・戦争：北宋与遼夏関係研究』萬巻楼.

渡邊　久　　1994「北宋時代の都監」『東洋史苑』44，pp. 28-62.

渡邊　久　　1997「北宋の鈐轄：宋代軍政官の一齣」『龍谷史壇』107，pp. 69-101.

渡邊　久　　1999「北宋の経略安撫使」『東洋史研究』57-4，pp. 69-103.

渡邊　美樹　2017「契丹の燕雲十六州領有と山後遊牧民」『史艸』58，pp. 75-102.

The Role of Military Commander under Domestic and Foreign Situation during the Reign of Taizu (太祖) and Taizong (太宗) of Northern Song Dynasty: Focusing on Chief Administration Office (*Dubushu* 都部署)

Kazuma ITO

The Northern Song Dynasty faced the military problems such as the campaigns to reunify the China Proper, the military clashes against Khitay, Vietnam and Tangut, and the assumption of the military forces to establish the foundations of powers by the Emperor Taizu and Taizong during the reign of Taizu and Taizong. This article examines the foundations of military powers of Northern Song Dynasty and its source focusing on the role which the Dubushu played and background of the people appointed to Dubushu.

Firstly, the author confirmed the history or character of Dubushu and then indicated that it was necessary to examine the position of the Dubushu looking down the miritary situation surrounding the Northern Song Dynasty.

Secondly, I surveyed the campaigns and the changes of the military situation during the reign of the Emperor Taizu and Taizong, and I pointed out that the Dubushu and the Mobile Brigade (*xingying* 行営) in the jurisdiction of the Dubushu consistently played the core part under these circumstances. Although the diplomatic policy of Northern Song changed in the reign of Taizong, Dubushu and the Mobile Brigades dealt with the external situation changing themselves' characters.

Thirdly, I examined the foundation of Northern Song military forces based on analysis of the birthplace, career and human relations of Dubushu. As the result, it is proved that Dubushu were alternated and recruited through the private relations with emperors or trust won from them. In addition, Dubushu and their ancestors almost had belonged to Shatuo (沙陀) and been from Hebei (河北) region, and moreover there were nomadic/non-Chinese people. It can be said that these trends were based on the activities by nomadic people in the mixed nomadic and agricultural area after the rebellion of An-Lusha (安禄山) in the latter of 8th century.

Based on above, I concluded that the foundation of the military force of the Northern Song Dynasty took over Shatuo and ascend to the rebellion of An Lushan.